



今、なぜSDAか？



今、なぜSDAか？

目次

第一章	今、なぜ SDA か？	1
第二章	再臨信徒のジレンマ.....	9
第三章	足りない事が一つある.....	15
第四章	1888 年の謎	26
第五章	地球最後のメッセージ.....	42
あとがき	71

第一章

今、なぜSDAか？

モーリス・ヴェンデン長老が牧師をしていた教会の近くに、したたか者の床屋がいた。政治と宗教を論じるのがその人の趣味と聞いたヴェンデン先生、何とかこの魂を導こうと、大いに勇んで長くもない髪をわざわざ散髪してもらいに出かけた。

「お客さん、ご職業は？」と床屋。「牧師をしています。」「ほう、なぜ牧師になられたんで？」「子供の頃から神を信じてはいたんですが、本気で宗教を求め始めたのは大学の頃からです。実はこんないきさつがありましてね。…」好調な滑り出しに気を良くした先生は、いかに神が彼を召されたかを熱っぽく語るのだが、相手は別に感じ入っている様子ではない。「それで牧師さんのお父さんは何をしてらっしゃいました？」「はあ…父も牧師です。」さもさりげなく、といった顔で床屋ははさみを動かしながら「牧師さん、教会はどちらの？」「SDA といまして、あまり聞き慣れないかもしれませんが、この教会はですわね…」と再びヴェンデン先生、SDA のユニークさについて熱弁をふるうのだが、聞いているのかいないのか床屋は「…で、牧師さんのお父さんはどこの教会でした？」とたたみかける。「は

あ、父も SDA でした。」そう答えたヴェンデン先生、この時ばかりは自分の父親が無神論者でアル中か何かであってくれたら、という気持ちになったそうである。つまり、どんなにそれなりの理由があって選んだような職業であり、宗教であっても、結局は彼は父親の真似をただけではないか、と床屋は言いたかったようだ。所詮、人間とはそれぞれが育った環境によってかたちづくられるもので後になってなぜ自分が今歩んでいる道を歩むようになったか、理論的理由づけを試みるものだ、と。

「今、なぜ SDA か」を若い世代が考えるとき、親、教師、先輩たちの敷いたレールというものを抜きにして語ることはできない。現在 10 から 20 代の SDA 二世、三世にとって教会は自分で選び取った道とは言えないだろう。子供のうちは親と一緒に教会へ行き、学院ではそこでの宗教行事に参加することが“当たり前”だった我々「温室育ち」の世代は、温室を出た後も教会とのつながりを保ち、教会に貢献していただくの愛着と使命感を持っているだろうか。そして SDA でなければならない理由と、その使命の担い手として誇りや喜びを見いだすだろうか？

アメリカにいた頃“PK”ということばを知った。プリチャーズキッズ、「牧師の子」の頭文字で、近年牧師の息子や娘に目立つ非宗教的態度、すすんで世の風俗を取り入れる傾向をさして「あいつは典型的 PK だ」というふうに若者同士で用いる。興味深いのはその言葉

にさりげなく込められている同情とも容認ともとれるニュアンスである。大人同士ならさしずめ「親御さんはあんなに立派なのにあの子はどうして」というところだろうが、この言葉にそのようなトゲがないのは何等かの共通意識、「何となく分かる」ものを若者たちがお互いに持っているためだろうか。曾祖父の代からの牧師、伝道師の家系に生まれた私などにとっては何とも身につまされる話である。

戦後 20 年、産声をあげたばかりの SDA 沖縄伝道部会における宣教が破竹の勢いで進展していた頃、一年で 140 人もの受浸数を出し、県下唯一だった私立小、中学校を設立、運営し、アドベンチスト・メディカルセンターには離島からも患者が押し掛け、一ヶ月も続く講演会には何百人もの聴衆が詰めかけるといって“全盛時代”に私は生まれた。しかも沖縄で最初の信徒となった婦人伝道師を祖母に持つ SDA 三世の「PK」としてである。当然ながら私の幼少時の思い出は教会とは切っても切れないものであった。二歳半の時から始まる私の断片的な記憶は、たとえば講演会の宣伝カーで巡回するときのアナウンスであり、足踏みオルガンやアコーディオンの音色なのである。小学校にあがる時分になると両親とも週日は遅くまで部会事務所に勤め、安息日ともなれば信伝、MV、老人会、そのほかの役員会という具合に子供とゆっくり過ごす暇もないほどのハードスケジュールだったのを覚えている。しかし当時はどの教役者の家庭も似たようなもの

であり、講演会、キャンプ、バザー、VBS、運動会、クリスマスページェント、新年会など老いも若きも一丸となって活動しているときの教会は燃えていた。SDA という拡大し続ける特殊なコミュニティの中で家庭と教会と学校が限りなく密着した毎日…それが幼かった私の知っていた世界のすべてであり、未来へ続く唯一のルールだった。親も教師も友人も、そして将来は職場も結婚相手もその内側で見つかることになるであろう完全に閉鎖された安住のコミュニティ。幼い頃の私にとっては「なぜ SDA か」など問題もなく「SDA が全て」であったようである。

しかし時は巡り、私が気づかないうちに変化は訪れていた。故郷を離れていた私がしばらくぶりに沖縄を訪れたとき、そこにはもうかつての世界はなかった。あちらこちらで昔なじみの人々に声をかけられ、面映ゆいような懐かしさを感じるものの、すでに私はあの「小さな世界」にいないのを痛感していた。それは教会が変わったというよりも私自身が変わりはじめていたせいだろうか。教会の帰りに喫茶店で漫画を読み、映画館に入っては「STARWARS」を鑑賞するのを何とも思わなくなった 15 才の夏であった。学期休み中、しかも旅先での私を教会へ通わせたのは、子供の頃からつちかわれてきた習慣（今や惰性といった方が的確だった）と、何とはなしに教会に集まるかつての友達の存在だったように覚えている。

今、教会は多くの若者たちの生活圏

から遠退きつつある。良くて一週間に数時間、しかも友人に会うのに利用する待合い場所ではなくなりつつある。それが子供の頃から通い詰めた教会で多くの知人がいる母教会であったとしてもである。彼らにしてみれば友人と落ち合うのに教会の方が喫茶店よりは好ましいと考えているのかもしれないし、教会の側としてもそのような役割を果たすことに甘んじているような感じを受ける。「最近の若いのは…」という決まり文句すら最近ではあまり聞かれなくなり、もはや彼らに真剣に何かを期待しているというよりは「時代が違うから仕方がないんだ」と妙に諦めたような響きがある。「理解のある」大人たちは、せめて彼らが教会に足を運んでくれるだけでも、遊びに来てくれるだけでも、と思っているようだし、若者たちもその程度割り切ってもらうのを都合良く思っているのかもしれない。

今年のライフ一月号の特集は面白かった。休みで地方の教会へ帰る三育っ子たちが重荷に感じる事…いわく「学院生は何でもできると思って特讃、伝道地便り、何でも頼む」「一度引き受けると何度でも頼まれる」「引き受けるのがあたりまえのような態度で頼まれ、断れば悪く言われる」「信仰がしっかりしていないのに証や祈りを頼まれるのがつらい」etc. 本人たちがそれに意義を感じていようとしまいと教会活動が義務づけられてしまう雰囲気、それと「古い考え方を強制する」大人の存在が若者たちの教会への足を重くして

いるようだ。確かに彼らとしてうちに燃える何かがあれば喜んで伝道するだろうし、証だって讚美だって、祈りだってするだろう。霊的にはぐくまれてもいないのに話せと言われ、また何故そうであるべきか納得がいかないのに大人の標準でクリスチャンらしく振る舞うことを要求される（これは安息日の過ごし方や衣服に関してのようである）のがたまらないというのも一理ある。

このような世代を抱えた学院教会はどうしているのか。先のライフ記事には「学院の教会は新しい企画を若者向けにしているが、地方教会は活気がない」し、「つまらない」、「暗い」といった学生たちの意見が目立つ。確かに学院では圧倒的に青年が多いし、かなり自由なプログラムが許される。伝道地便りの劇をし、聖書クイズ大会、野外礼拝、音楽プログラムをもち、人形劇をする。私自身、学生時代に好んでやった宗教活動といえば、いかに集会を面白くし、伝道を楽しめるかという努力だったように思う。いわば宗教に飽きが来ないように霊的娯楽のカンフル剤を打つのに一生懸命だったのである。しかし笑いがあればあるほど、いろいろ工夫を凝らせばこらすほど、本質的なものからそれていくのではないかという恐れが常につきまとったものである。どんなに演出効果を高めてもそこにはかつての足踏みオルガン一台しかない天幕講演会に大勢の聴衆を引きつけたあの力はなかったし、何故わざわざこんな事をしなければならぬかという当初の疑問は未解決のまま残され

るのだった。

青年伝道の低迷は世代の違いが原因だとよく言われる。考え方、ライフスタイルのめまぐるしく変化する現代において時代を先取りしていく世代に対し、それにろくろくついていけない中、高年層の固定観念を押しつけようとするからいけないんだというのが定説のようだ。しかし仮に若者による若者のための“ナウい”伝道なり、教会ができるとして、青年の数を増やすことがはたして「何故 SDA か」の解答になるだろうか？ そんなむずかしいことはどうでも良い、ただみんな楽しくできればそれで良いではないか、というのではこの教会の存在する理由があまりにも希薄である。若者が集まれば集まるほど、安息日、結婚問題から衣服、食生活、娯楽に至るまで「何故 SDA は…」という声は後を絶たないだろう。そのような世代に教会を適合させるとなると、これは単なる伝道方法の変化にとどまらず、教会の方針、さらにはその目的自体の変化をも意味しないだろうか。我々はそこまで許しても良いのだろうか。もしそれが行きすぎたとしたら、どこで線を引けばよいのだろうか。

いまの世代を特徴づけるものは思想、主義よりもフィーリングに走る傾向である。消費者としての彼らを見ても、質よりは外見、少々値が張ってもブランドという思考はかなり強い。これが教会にまで持ち込まれるなら、教理よりは交わりを重視し、理念よりはムードを優先することになりかねない。

多様性の一致が必要だとも言われる。様々な人がいて、様々な思想、表現方法があっても良いではないか、共存することを学ぼうと。わたしは、教会を取り巻くあらゆる思想は次の二つに大別することができるように思う。すなわち人を集めるために教会を変えるか、教会に集めるために人を変えるかである。これらが究極的には、罪人を救うために神の要求を変えるか、神の要求に沿って救われるために罪人が変えられるかの論争点にまで及ぶかも知れないという懸念は考え過ぎだろうか。豚肉料理がふんだんにつかわれ、祖先崇拜が根強い沖縄人社会に SDA が伝えられたとき、教会は彼らを勝ち取るために標準を下げることをしなかった。迫害も偏見もあつたが収穫も多かった。今日の世代に対する伝道はそうはいかないのだろうか。

よく言われる「世代の違い」とは具体的に言えば豊かさの違いではないのか…ピクチャーロール一つで大人も子供も飽きもせず伝道集会に集まってくる話、家族に勘当され村八分になりながら信仰を守り通す話など、かつての沖縄伝道戦線をほうふつとさせるこれらの報告は今日では中南米、東南アジア、アフリカと言った発展途上国でしか聞かれない。現世での幸せに恵まれていない者が来世に望みを託すのはごく自然であり、そのような人々に再臨一本槍のアドベンチズムが受けるのも納得がいく。しかし今日文明洪水国日本の若い世代は、教会を心の支えとす

る必要がなくなったのかも知れない。かつて教会の教えに慰められ、教会の発展に生き甲斐を感じた世代は、今や教会とは別に、あるいは教会と平行して社会的成功、豊かさを手にした世代ととって変わりつつあるのだろうか。

GNP と宗教に対する依存度が反比例するのであるなら、現在伝道の成果が上がっている国々もこれから生活水準が向上すれば、日本と同じ路をたどるのであるだろうか。日本の SDA の伸び悩みは再び何等かの社会不安が我々を襲うまで続くのであろうか。

心ある信徒達は米国日曜休業令やカリフォルニア大地震がリバイバルの火付け役となってくれるのを期待し、これらの問題がよりエスカレートするのを心密かに願っているのかも知れない。我々が遅かれ早かれこれらの問題と直面することは確かだ。しかし仮に日曜休業令が今年具体化し始めたとしても、今の状態では教会内に混乱と不安を引き起こすだけでリバイバルどころではなくなるのではないかと思う。我々が今必要としているのはこの教会に対する確信と、その確信を行動に移させるだけの霊的覚醒…つまり SDA でなければならぬ理由づけと動機づけである。迫害があればリバイバルが起こるのではなく、リバイバルが迫害を呼ぶのである。

「迫害の火が消えているように思われるのはなぜであろうか。その唯一の理

由は教会が世俗の標準に妥協したために反対を引き起こさないということにある。…初代教会の信仰と力が復興するならば迫害の精神もまた復興し、迫害の火は再び点じられるのである」(大争闘下 p42)。

日曜休業令さえ出れば皆本気になって教会へ来るだろうなどとたかをくくってはいはならないのだ。ニワトリが先か、卵が先か、リバイバルか迫害か、証の書はリバイバルが先であるという。

ではどうすれば教会は、ことに青年達は真に燃やされるのか。単に若者向けのプログラム作りといった小手先の処方では解決にならないこと、今の状態のままでは迫害を待っていたらそれが来たときにひとたまりもない事はすでに分かった。今はこういう時代なんだとサジを投げていたのでは、らちがあかない。こういう時代だからこそ、リバイバルを必要としているのだ。

我々の前途が必ずしも絶望的でないことは、現にこのような世代を相手に若者ばかりの急成長を遂げた教会がある事実を見れば明らかである。しかも彼らは一人びとりが熱心な伝道者である。なぜ統一教会にそれができて我々にできないのか。「あれは偽リバイバルだ、狂信だ」とあっさり片づけてしまう前に、何がそんなに若者を引きつけるのか分析できないものだろうか。特に私が興味深く思うのは彼らが青年を獲得するのに、現代音楽やスポーツ、パーティーといった SDA の常套手段に

頼っていないという点である。

一つ明らかなのは、私がコンタクトをもった統一教会の青年達は教会員数を増やすことを伝道の最終目的としていないということだ。彼らの頭にあるのは教会を青年で一杯にしてみんなでワイワイ楽しくやることではない。彼らには共産主義と無神論を打倒し、地上王国を建設するという具体的かつ現実的な目標がある。近い将来に達成すると信じて疑わないその目標のために彼らはすべてを犠牲にするのであり、そのために人員獲得に励む。始めはその数も少なかつただろうが、本気で信じ実行する者には説得力がある。しかも指導者のカリスマは彼らに寸分の疑いの余地も許さない。信者の間には「同志」といった意識も芽生え、一種独得の運命共同体ができあがる。あらゆる困難、迫害もその悲壮なまでの結束力を強めるだけである。彼らの共有するビジョンに生き甲斐を求め、そのひたむきな生き方や人間関係に理想を求めて今日も多くの若者が献身していく…。

それにひきかえ SDA の青年伝道は目標がない。教会が若者で一杯になったらいいなあと願いこそすれ、何の為に集めるかとなると一致した見解がない。(これは青年伝道に限ったことではなく、一般的に最近の SDA の伝道目標はいつまでに何人のバプテスマを達成するかばかりである。) 現に一杯になったら皆で何をするつもりなのだろうか？ 更に大規模な人集めだろうか。なぜそうまでして青年を集めるのだろうか。彼

らに SDA 教会の門をくぐらせてしまえば彼らを救ったことになるだろうか。人数が目標なら、狭き門(標準、教理)は邪魔になるのではないか。

統一教会を脱会して、SDA になった青年の一人は「今では何の喜びもない」と寂しそうにもらした。かつて自分にあれほどの生き甲斐を与えてくれた統一原理に優るものが SDA に見つからないというならまさに悲劇である。わたしはそのような教会に青年を導きたいとは思わない。

「まだ生まれ変わっていない信徒、一度改心したのに再び元の状態に戻ってしまった信徒がいるために、主は多くの魂を今真理に導くことをなさらない」(教会への証 6巻 p371)。

—昨年度の沖縄連青主催クリスマスバンケットに八重岳集会所青年会が音楽プログラム担当を頼まれた際、連青の許可を得て、リアリティ読者の各教派青年を招待した。年末が稼ぎ時の統一教会からは忙しい中、支部代表二名の参加があったが、彼らは SDA 青年一般の実体に呆れていたようだ。熱心さにおいても数においても彼らが我々をうわまわっているのは否めない事実だ。いったい、何が違いをもたらすのか。

統一教会、エホバの証人、末日聖徒の三者に共通してみられるのは独得な終末観であり、自分たちこそ世の終わりに摂理によって現れた特別な教会で

あるという自負である。その特異な教理のゆえに異端の烙印を押されるのだが、同時にその特異さがあればこそ自らのアイデンティティーを保ち、熱心な青年男女の信奉者を集めることができるようだ。今でこそ SDA は、彼らにお株を奪われた感じだが、我々のルーツはあの再臨運動であり、異端呼ばわりされたそのメッセージが当時の社会に与えたインパクトは今日の統一教会など物の数ではなかった。思うに、SDA の衰退はその中心思想であるべき再臨信仰がおろそかにされた事に始まったのではないだろうか。現在の SDA の何%ぐらいが今世紀中にもキリストが来られるのを期待しているか、更にその内の何%が実際に預言者の勧告に従い、再臨に備えているだろうか。もし我々が統一教会ほどの発展を望むなら、少なくとも統一教会員が彼らの王国設立を信じているのと同じぐらいの真剣さで我々の世代に起こる再臨を信じてそれに備え、彼らが文鮮明氏を疑わないのと同じぐらいの信仰でホワイト夫人の勧告を受け入れねばならないだろう。再臨の切迫感を持たない再臨信徒達に活気がないのも不思議ではないし、そんな学校で学ぶ生徒達が、なぜ自分は SDA でなければならないのか混乱し始めるのも当然である。かつて SDA の牧会をはじめ、医療、教育、そして出版や食品事業の先駆者達に至るまで一貫して流れていたのは、いかにして再臨までに福音を全世界に宣べ伝えるかという燃えるような使命感であり、それが彼らを不可能に挑ませたのである。あれから一世紀、経済的に

も組織的にもめざましい成長を遂げ、ほぼ全世界的に福音を宣べ伝え終わった我々ではあるが、富める若い役人のように「足りないことが一つある」のではないだろうか。若者の教会離れという現実を前にして自分たちの無力さを感じるとき、「あなたはどこから落ちたかを思い起こし、悔い改めて初めのわざを行いなさい」という主の声が耳に痛い（黙示録 2:5）。

伝統的再臨信仰に立ち返る（ある意味で SDA ファンダメンタリズムか）のは狭量、保守的、反知性に逆戻りすることであるというネガティブなイメージが強いかもしれない。再臨が近いんだから医者になる必要はない、大学など行っている暇はない、結婚なんか考えているときではない、会社も辞めて明日から文伝…?! これだから極端は嫌なんだ、とすぐ拒否反応を起こす前に冷静に考えてみたい。確かに世から習い、世に倣うことによって機関も人材も整い、一流のノウハウが教会内にも確保された。そのおかげで新聞の特ダネになるほどの異種間心臓移植さえ我々の病院でやってのける時代になったが、その反面では、どうせ世と同じ事をし、世の人々にひけを取らないのが望ましいなら、なぜ SDA であることに固執しなければならないのか、という問いかけを若者達はぶつけるようになった。学問や職業、ライフスタイルにおいて、さらには信仰のあり方においてなぜ時代遅れなアドベンチズムを固守しなければならないのか、と。納得がいかないまま強制されることに強

く反発しながらも、彼らは親や教師に具体的な示唆を、納得がいく信仰を、ことによってはカリスマを求めているのかもしれない。選択は自分でしたいのだが、誰か確信を持って道を示してくれる人、ライフ誌の言葉を借りれば『俺についてこい』という昔の青春映画みたいなものを求めている」のである。今、アドベンチストの大人達はそれが最後になるかも知れないこの世代に、どのような精神的遺産を残してやれるだろうか、パイオニア達は我々に何を残してくれたのか。

再臨信徒…それがただ単に毎週教会へ行き、いつかくるであろう再臨を漠然と信じて待っている善良な人々、という意味ならどの教派も基本的には変わらず、必然的にSDAの存在価値は薄れる。しかし1844年のミラライト(ウィリアム・ミラーたちによる再臨運動のこと)達は生きて主に会う備えをするということのなんたるかを世に示し、惰眠をむさぼる一般教会に改革を迫るといふ、ユニークで力強い使命を果たしたのだった。彼らの目標はそれまでのクリスチャンのように単なる自己の救いではなく、花婿の道備えだった。世代は変わり、社会のニードは変わったように見えてもアドベンチストが存在する理由とその使命は変わらない。それが見失われ、他の教会や事業団体の物真似を始めたために我々のアイデンティティーも薄れ単なるプロテスタントの一派に成り下がってしまった。生きて主を迎える準備という他のどの宗派もなし得なかった重大使命、

これを果たす事によってのみ、SDAの存在価値はあるのである。我々がまずしなければならないのは教会内においてその使命を再確認することであろう。何しろ生まれた時から教会で育った青年達が最終世代としての自覚を持っておらず、この教会に魅力さえ感じていないというのが現状なのだから。

第二章

再臨信徒のジレンマ

私が中学生だった頃、当時 92 歳だった野崎金一先生が学院に来られたことがある。この先生には、先生が生きておられる間に再臨があるという噂がつきまわっているのだが、何でもその所以は先生が若かりし頃、何人かでホワイト夫人と食事をしていたとき「この中に生きて主を迎える人がいる」と言われたとか言われなかったとか。そのグループで唯一残った先生は今や注目の的である。そのためか先生が説教で登壇されようとして一瞬よろめいたのを見た学院生達が「お一危ねえ」「まだ早いぜ」と思わず漏らしたのは印象的だった。幸いに(?)先生はまだご健在のようだが、再臨を現実問題として考えるとき、我々がたじろいでしまうのはなぜだろう。再臨を待ち望んでいるはずの再臨信徒がこういう有様ではいたって情けない。再臨使命を云々する前にまずこの逃げ腰の姿勢からなんとかできないものだろうか。

一般的に再臨と聞くと同時に二種類の反応が起きるようだ。先の例をあげるまでもなく、真っ先に来るのが「まだ準備が出来ていない」「今、再臨があったら現在自分が手にしている楽しみが取り去られてしまう」という恐れであ

り、まだ再臨があつてほしくないという本音である。しかしすぐそれを打ち消すかのように「どうせ再臨なんかいつ来るかわからない」という諦めが起る。人によってはそれは安堵感と言ったほうが正確かも知れない。そして「馬鹿正直に待ちぼうけを食わされたのではたまらん。その時が来るまで人並みに人生を楽しもう」と結論づけてしまうのである。

先ず「準備が出来ていない」と感じる事に関しては先号のリアリティ「信仰による義」特集でとりあげたのでここでは省くが、救いのメカニズムは単純でしかもたやすい事なのである。「信仰による義」とは、一般に考えられているように一生懸命「私は救われる」と思い込む、或いは心に念じる事ではない。それさえ出来ない、つまり救いを自分で実感出来ず、救いの有り難さを感じとれない青年が多いが、救いに関して我々のなすべき部分はもっと簡単明瞭である。一言で言ってしまうと、それは神が私を救いつつあるのに気づく事であり、気がついたら神が救うにまかせる事である。つまり神の邪魔をしなければ救われてしまうのである。(この気づくという行為もやはり受け身であり、気づかせて下さるのはいつも神である。そして神が救うにまかせるには闘いを通らねばならず、厳しい選択を強いられる。それは多くの人々が考えているようなものではなく、自分で自分を救わないという選びであり、自己に死ぬ闘いなのである。)この事実を知らず、信じておらず、そして体験

できていない為に教会は死に瀕している、とホワイト夫人は書いている。

次に「今、再臨があったら現在手にしている、あるいは手にしつつある楽しみや計画が奪われる」という恐れについてであるが、これは神についての認識不足が原因だと思われる。

我々は天国といえは白い衣を着た聖人達が雲の上でたてごとをかき鳴らしている場面か、子供達がライオンと戯れる図を想像しがちだが、正直言ってそれらはそんなに魅力的な光景ではない。そんな事より今、この地上で趣味に、仕事に、結婚に幸福を見出す方が現実的であり、手っ取り早く思える。多くのクリスチャンでさえ、この世での楽しみを与えられたのが神である事を忘れ、まるで天国に行ったら何も楽しめる事が無いかのように、再臨の前にあれもこれもしておきたがるのである。「愛する兄弟たちよ。思い違いをしてはいけない。あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から光の父から下って来る」(ヤコブ 1:16,17)。この罪に汚れた世においてさえこれだけの幸福と楽しみが残されているなら天国はどんなに素晴らしいだろう。

「神は単に生存に十分なだけを備えることでご満足なさらなかった。神がいかにあなたを愛しておられるかを知らせるために地にも大空にも美しいものを満たされたのである」(祝福の山 p119)。

神が造られたこの世界を合理性という観点のみから考えるといかに無駄が多いかに気づく。何の為に神は楽しさ、美しさ、美味しさ、心地良さ等といった我々の存在に必ずしも必要でない要素をこの世界の至る所にちりばめられたのだろうか。一例をあげれば、人間が生きていく為に何故飲食というプログラムを与えられたのだろう。単に生かしておく為だけなら無味乾燥なビタミン剤や点滴でも、あるいは極端な話、光合成でも良かったのだし、何もわざわざ人間の味覚や視覚、嗅覚、触覚を楽しませる方法をとる必要はなかったはずである。食生活ひとつとっても人間の幸福に対する神の配慮は並々ならぬものであるが、これとて創造の多彩なわざのごく一部分に過ぎない。神は我々が人生を楽しみ、喜ぶ事を望まれる御方なのだ。

ふり返れば私がアメリカで過ごした高校時代は楽しいことばかりではなかったにせよ、それでも数々の経験に恵まれた2年半だった。休みともなればロッキーの山肌をスキーで滑降し、ロッククライミングに挑戦し、マイアミビーチではサーフィンに興じ、オハイオではセスナを駆ってアクロバット飛行に挑み、ヒッチハイクで見ず知らずの土地を旅し、学費をまかなう為の植林のアルバイトで泥だらけのテントにこもりながらインディアン青年とクリスマスを祝い、養蜂家見習い中に蜂蜜を狙って出没する熊と知恵比べをした事などまるで昨日の事のようなさ

らにはアルバイトで運転していたトラックもとも積荷がハイウェイ走行中に爆発炎上したり、崖から乗用車ごと転落する事故で奇跡的に助けられたり、友人達とフロリダのとある湾岸で空き家に泊まっていたところを麻薬密輸団と疑われ、真夜中からパトカー3台、白バイ2台、警察犬に取り囲まれ身体検査までされるなど、遠く離れている両親をハラハラさせる事件に事欠かなかった。

天国でこれらと同じ体験をする事はないだろうが、それにしてもこの地上での素晴らしい体験、楽しい出来事、ワクワクするような経験が、天国に行った途端、何も無い永遠に静かな瞑想の生活にとってかえられるとはどうしても信じられないのである。これから我々が移り住む場所の素晴らしさを聖書は「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(第一コリント 2:9)と証言している。つまり現在我々が想像するどんな楽しさをも超越した、言葉では表現できない程のあらゆる幸福があるというのだ。もし我々が信仰によって天国の素晴らしさを認め、更にそこへ行く事がどれほど単純かを知るならば、再臨の接近についての恐れはなくなり、SDAの青年達に再臨使命者たらしめる事を阻んできたつまずきの石がひとつ取り除かれる。この時彼らは初めてSDAの使命を再考する心のゆとりができるのではないだろうか。

次に再臨信徒にとって第二のつまずきの石となっているのは「再臨なんかいつあるかわからない」という不確実さである。まずは日曜休業令が出るまで現状維持でいこうというのが洋の東西、年齢を問わず多くのアドベンチストに見られる態度だ。再臨運動が始まってから140余年、生きて主を迎える日を待ち望んでいた幾世代もの人々が既に眠りにつき、彼等の夢はまだ実現していない。それが今になって我々の世代に起こると確信をもって言える根拠はあるのか。それともこれから数十年、数百年先とも知れないその時をただひたすら待つしかないのだろうか。そして現実問題としてその間、就職や結婚、子供の教育、伝道といった仕事や生活面において我々はどのように待てば良いのだろう。

一つ確かなのは「あと数百年か数十年か…」という考えは本来のSDA思想には無いという事だ。そもそもSDAが教育、医療、出版、健康食品といった事業面や、食習慣、衣服、娯楽といった生活面においてさえ世と分離して独自のスタイルを打ち出したのには「すぐに来られる主を迎える為」という大前提があった事を忘れてはならない。故に再臨の切迫感が薄れるなら当然SDAの教理やライフスタイルに影響する。我々がパイオニア達から受け継いだのは「あと何十年再臨が来なかった場合…」という生きかたではない。ホワイト夫人を初めとするパイオニア達の歴史観…すなわち、およそ六千年の地球歴史は再臨をもって終り、その

後に続く千年期を経て七千年間の罪の歴史は永久に幕を下ろすとの考えかたは独断的だろうか。オーソドックスな SDA の預言解釈によれば聖書は 19 世紀以降を終わりの時と呼んでいる。この時以来、世界伝道が組織的に始まり、また伝道の中心もヨーロッパからアメリカへと移り、現在までの二百年間で地球上ほぼくまなく福音は宣べ伝えられた。そして 1844 年に最後の裁きが始まると同時に、かねて黙示録が預言していた「残りの民」が集められ、地球最後の使命を担う教会、SDA の誕生となった。以来、真理と誤謬の大争闘はそのクライマックスに入ったのだが、カトリックの死ぬ程の傷が癒された事に始まり、心霊術の浸透、共産主義の誕生、二度にわたる世界大戦と今や全人類の存在を脅かす核兵器の脅威、かつてない高度の文明と道徳の退廃を見た激動の 20 世紀もあと残すところ 14 年…それまでにすべては終わるのだろうか。終わってはならない理由があるだろうか。「終わらないとは言えないが、もし終わらなかった場合の用意もしておくのがバランスのとれた信仰だ」という意見もあるだろう。しかしあの 1844 年の再臨信徒達が「万一の時の用意」をしておかなかったからこそ SDA という教会が誕生したのであって、彼等がそこまで頑固一徹に再臨を信じ、大失望を経験したからこそ現代の真理を発見したのではなかったか。もし再臨が起こらなかった場合、すんなりと今までの生活と一般教会の信仰へ戻るような用意を彼等がしていたのなら、わざわざ新しい教会を組織する必要も

なく、歴史は大きく変わったものになっていただろう。当時の再臨信徒の一人で後に預言者として召された女性の警告に耳を傾けてみよう。

「この悪い僕は『主人の帰りが遅い』と心の中で思っている。彼はキリストがおいでにならないとは言わない。彼は主の再臨という考えを嘲笑しない。しかし心の中で、またその行為と言葉によって主の来臨が遅いと宣言する。彼はほかの人たちの心から主はすみやかに来られるという確信を追い出す。彼の影響で人々の世俗心とまひ状態がますますひどくなる。…それは恐るべき同化作用である。…嘲笑する者、すなわち真理をこぼむ者が僭越になった時、各方面の金もうけ仕事は原則を無視してくりかえされている時、研究者が聖書以外のあらゆる知識を熱心に求めている時、キリストは盗人のように来られる。世のすべてのものが激動している。時のしるしは陰悪な兆候を示している。きたるべき事件が影を前方に投げている。神のみたまは地上から引き上げつつあり、海と陸に次々と災害が起こっている。嵐、地震、火事、洪水、あらゆる種類の殺人が起こっている。だれが将来を読むことができよう。どこに安全があるだろう。人についてもこの世についても保障は何もない。人々は自分の選んだ旗の下に急いで参加している。落ちつかないで彼等は自分達の指導者達の動きを待ち、見守っている。主の現われを待ち、見守り、そのために働いている人達がいる。もう一方の種類の人達は最初の大背

信者の統率下に参加している。避けるべき地獄と獲得すべき天国とがあることを全心全霊から信じている人は少ない」(各時代の希望 下 p103-105)。

クリスチャンは主人の帰りを待つ僕だが、SDAは眠った僕達を叩き起こす役なのである。「花婿だ、迎えに出なさい」というのがSDAの使命であり、「もうしばらく待とう」とは決して言わないのである。冒頭で述べた現在のSDAのジレンマこそ「主人の帰りは遅い」という信仰が産み出した実ではないだろうか。ここ数年間、特にアメリカにおいて深刻化しつつあり、アドベンチスト・レビュー誌にも特集号が出されるようになったSDAの飲酒、離婚問題、更には一般ジャーナリスト達からさえ叩かれるようになったユニオン・カンファレンスのレベルでの汚職とそれにからむ80億円の損失を出したダボポート倒産事件、ABC対アンドリュース大学教授プラクターの裁判でABCが独占禁止法に触れて敗れ、PPA(パシフィックプレス)で女性職員と男性職員の給料差額が引き起こした訴訟でPPAが編集員マックリオドに敗れた例、SDA医師による中絶に失敗して生き残ったマルコ・ホップス君の裁判、SDA同性愛者だけのキャンプミーティング、教会堂で性的小児虐待を重ねていた教会執事ケン・カーペンター逮捕、アンドリュース大学学長ジョセフ・スムート博士が私服警官に性的暴行を加えようとしたかどで逮捕され辞任した例(法廷での本人の証言では彼を失墜させようとの企みだと主張している)、

最も基本的な教理に関する神学者達の不一致、預言者に対する不信、最近殉教者まで出した共産圏の忠実なSDA信徒に対するカンファレンスの迫害、そして下降線をたどる一方の諸献金とうなぎ上りを続ける医療、教育機関の負債や政府の援助に頼る傾向(例えば北米の全アドベンチスト病院を包括するSDAヘルス・システムInc.の債務は合計約10億ドル=2000億円だと報告されている)等…十年前までは考えられなかったようなニュースがTV、新聞、週刊誌といった一般のメディアにすっぱ抜かれるようになったのはごく最近の事である。それぞれに理由はあるだろうが、SDAの恥部が異邦人達の目にさらされるようになった今日、これら教会の霊性のバロメーターは何を警告しているのだろうか。「まだまだ」という信仰が既に結び始めたこれらの実を見る時、我々はこれ以上事態を放っておいて良いのだろうか。再臨を待ちくたびれたラオデキヤの症状は時間の経過とともに悪化しつつある。たまにメキシコの地震を聞いたり、コロンビアで噴火があったり、日航機やスペースシャトルが落ちたりするのを聞くと何となく再臨が近いを感じる。しかし、世の中が平和を取り戻すとまた元の生温い生活に戻り、更に深い霊的不感症におちいってしまう。日曜休業令の噂も出たり、引っ込んだりを繰り返すうちに狼少年の叫びのように誰も反応しなくなる。一つ一つの出来事を取り立てて騒いでいたのではきりが無い、確かな証拠が与えられるまでは何も言わない方が無難だ、とでも言いたいかの

ように。そもそも「花婿だ、出なさい」と言うべきSDAが“待つ”という消極的かつ懐疑的な姿勢に甘んじているのが問題ではないだろうか。

第三章

足りない事が一つある

再臨とはただ待つものだとばかり思っていた私の目を開き、希望を与えてくれたのは次の証の書の言葉だった。

「救い主の来臨を待ち望むばかりでなく、これを早めることがすべてのクリスチャンの特権である」(患難から栄光へ下 p308; 実物教訓 p47)。

いつ再臨が起こるかに我々が関与しているというのだ。私の行動いかによってはそれが早くも遅くもなるのだ。では、再臨を早めるにはどうしたらよいか。

「世に福音を伝える事によって、主の再臨を早める事が我々の力で出来る。我々は神の日の到来を待っているだけでなく、これを早めるのである」(各時代の希望 下 p101; 祝福の山 p136)。

なるほど、伝道が早く完了すればそれだけ早く再臨が実現するわけだ。そうとわかればともかく目標がはっきりする。今や我々の考えなければならないのは、いかにして世界中に福音を伝えるかである。ここで再びヴェンデン先生に登場願うが、子供の頃、彼が考えた伝道計画は誰でも一度は考えそう

なたぐいのものだ。まず各国語で安息日などについてのビラを大量印刷する。それから飛行機をいくつもチャーターし、世界中にそれをバラまく。こうして真理の無差別爆撃により、またたく間に福音宣伝の任務は完了し、キリストはおいでになる!? この子供らしい発想を笑う我々とて、結構同じような物の考え方をしているのかもしれない。我々はともすれば、伝道の成果はいかに多くの人々に聞かせ、読ませるかにかかっているかのように錯覚しがちだ。雑誌の発行部数を増やし、TV やラジオを視聴率の高い時間帯に流し、大都市での講演会々場の確保 PR に大金をかけて多くのターゲットを一度に狙う方法は確かに合理的といえるかもしれない。しかしどんなに多くの人々に読ませ、聞かせようが受ける側の霊の眼が開かれない限り実は結ばない（第一コリント 2:14）のを我々はイヤというほど知っている。真理を人々に納得させるのは聖霊の働きである。

「聖霊と神の力がなければ真理を伝える為に我々が働くのは無駄である」(5T p158)。

聖霊は現在も働いているだろうか？ 勿論、言うまでもない。それではどうして今日の日本において伝道の成果が上がらないのか。単に世代や宗教観の違いのせいだろうか。聖霊はそれぐらい克服するだけの力がないのだろうか。

「我々が聖霊を用いる事はできない。」

**「みたまが我々を用いて下さるのである」
(各時代の希望 下 p158)。**

主導権は聖霊にある。だとすれば聖霊が働けないような方法、思想、状況を造り出したかもしれない我々に責任があるのではないか。自分本位の伝道に聖霊の協力を要請するような僭越さが我々にはなかっただろうか。本来ならば、まず我々が謙遜に聖霊の指示を仰がねばならない筈である。最後の働きはペンテコステを上回るものになるとホワイト夫人は言われたが、ではどうすれば弟子達のように、否、それ以上に真に満たされて働きを完結させる事ができるのだろうか。何が聖霊降下を阻んでいるのか。

今までのポイントをまとめるとこうなる。現代 SDA (特に青年達) の低迷は；

① 何故 SDA かという理由づけがなされていない為で、この教会の目的、使命が知らされていない事に起因する。

② 何故 SDA の使命や、存在価値が見失われたかということ、再臨信仰から離れたからである。もはや再臨の切迫を信じていないし、望んでもいない。

③ 何故再臨を望んでいないかといえ、**「まだ準備が出来ていない」「まだこの世での楽しみを失いたくない」という恐れがあるからで、それらは福音を理解する事によって解決する。**

④ 再臨信仰を弱める最大の要素は「いつあるのかわかりやしない」という不信だが、再臨とは SDA の状態によって早くも遅くもなるとの重大な事実気づいていない。

⑤ 再臨を早める為には福音を全世界に理解させねばならないが、それを可能にする聖霊の力が教会に欠けている。

では一体どうすれば聖霊の力を得られるのか。この一事に SDA の明日が、ひいては全世界の運命がかかっていると言っても過言ではないだろう。

「聖霊は働きをするのに用いることができる通路を待っておられる。…神の霊はそれを受ける用意が常にでき次第、教会に注がれるのである」(彼を知る為 p330)。

「もしも我々が神に器を提供するならば神は働きをなさる」(9T p107)。

なるほど、聖霊は我々がそれを受け準備ができるのを待っておられるわけだ。その準備はそっちのけで勝手に伝道、伝道と走り回ったとしても世界伝道はいつまでもおぼつかない筈だ。では聖霊を受けるにはどう準備すればよいのか、そしてその為にはどれくらいの期間を要するのか。

「我々の品性の欠点を改め、心の宮のすべての汚れを清めることは、我々にゆだねられている仕事である。その時

に秋の雨がペンテコステの日に弟子達に下ったように、春の雨(後の雨)が我々の上に下るのである」(教会への証 5巻 p214)。

「すべての陥りやすい罪、高慢、利己心、世を愛する心、すべての悪い言葉と行為とに勝利した者でなければ『慰め』注:後の雨)にあずかることができないのをわたしは見た」(初代文集 p71)。

案の定、恐れていた事がついに宣言されてしまった。聖霊を受ける為の条件、それは清めである。我々が「全ての汚れを清め」なければ後の雨は与えられず、後の雨による聖霊降下なくして伝道は進まない。これでは再臨の可能性はますます薄らいでゆくようだ。そもそも、今まで再臨が起こらなかった事自体、どれ程清めが困難で時間のかかるプロセスであるかを物語っていないだろうか。パイオニア達やホワイト夫人自身さえそのテストに合格しなかったのだろうか。もしこれらの敬虔で献身的だった指導者達が一生かかっても聖霊を受け損じたとすれば我々のような者には何年かかるというのだろうか。もし聖霊を受ける為の清めに関して我々が彼らを上回らねばならないとしたら、どれ程の完全を要求されるのだろうか。率直に言って、彼等はどれくらい清かったのだろうか？私自身興味を抱いたので教会歴史を少しかじってみた。預言者が生きていた頃の教会は今と違ってさぞ熱心で標準の高い人々ばかりだったに違いないと思っていた私

は意外な事実を発見した。

1844年の大失望以後、神の導きを疑わなかった一団は聖書研究と預言の霊の導きによって一つずつ真理を示されていった。1845年から1848年にかけて「残りの民」或いは「小さな群れ」と称するこのグループは教理的にもまとまり、ここにSDAの母体が出来上がった。その年からホワイト夫人は出版物に記事を書くようになったが、彼女の言葉を年代順に追ってみると当時の再臨信徒達の状態がよくわかる。

1848年から1851年までの記事は主に彼女が見た幻の説明であり、再臨の遅延はすべての再臨信徒がまだ印されていないからで、この待ち時間に彼らの信仰が試される、といったような励ましの内容である。ところが1852年になると彼女は初めてラオデキヤという名称を再臨信徒にあてはめ、譴責のメッセージを送るようになる。同年6月10日のレビュー&ヘラルド紙の記事だが初代文集の205ページにそれを読む事ができる。

1852 6/10RH

「キリストが速やかに来られる事を待望していると公言する人々は「ほんの少し前に離れてきた名目的教会のように冷たく形式的でラオデキヤ教会にあてられた言葉が彼らの現状を完全に描写している。」彼らは「世俗の人々と同様に装い、語り、行動している。」もし

今日キリストが再臨信徒と共にいたなら「彼のしみのない自己犠牲的生活は彼らを責め、彼の聖なる厳肅さは彼らの軽率さやむなしい笑いを抑制する苦しいものとなるだろう。」

※この年、教会は初めて自分達の印刷所を設け、定期刊行物やパンフレットの出版に力を入れるようになるのだが、靈的には下降線をたどっていたようだ。

1853 2/17RH

教会は「キリストが間もなく来られることと、我々は罪の世界に伝えるべき最後のあわれみの使命を持っていることを心から信じているだろうか。…娯楽やこの世に心を向けさせる物の追求が多すぎる。心は衣服のことに奪われすぎ、舌は軽率でつまらぬ話をしすぎて我々の告白が偽りであることを示している」(初代文集 p210～)。

※この年、初めて安息日学校が組織的に始まり、最初の教会学校が発足したのだが、ラオデキヤ状態は深まる一方だったのだ。

1854 経験と幻の補遺

「わたしは残りの民がこの地上に起ころうとしている事のために準備をしていないのを見た。最後の使命を持っているという信仰を公言する人々の大部分は昏睡状態のような無感覚に陥っ

ている。」「わたしは神の民が…ある者は時の短いことや魂の価値について、全くといっていいほど自覚を失っているのを見た。安息日遵守者の中に、誇り、すなわち、衣服や外観の誇りが忍び込んできている」(初代文集 p222-224)。

1855 証

「自己否定と犠牲の精神がこの教会から殆ど消えた」(1T 115)。「最近幻があまり与えられなくなった理由は教会がそれらを快く受け入れない為であるのを、示された」(同 119)。「天使が若者達を天秤ではかっている。小説、衣服や見せびらかしへの執着、虚栄心、プライドはすべて量られる」(同 214)。

※この年、教会は本部をバトルクリークに据え、出版社も組織され、いよいよ本格的な伝道態勢が固まってきたのだが、サタンは確実に内部から崩しにかかっていた。

1856 証

5/27の幻:亡びに至る広い道を多くの再臨信徒たちが世俗の人々と共に歩んでおり、彼らは表情こそ少し暗いがそれ以外はまわりの人々と何等変わらない。再臨信徒の衣には「世に対して死んだ者」「終末はすぐそこまで来ている」「汝も備えをせよ」といった文句が書いてある。彼らはまわりの陽気

で思慮の浅い人々と同じ会話をしているが、時々自分達の衣に書いてある警告を指差して他の人々にも同じ言葉を書くように勧める。まわりの人々は一向意に介せず、「我々は同じだ。衣服も、会話も、行いもあなた達と全く変わらないではないか」と言った。かつて1843,44年当時は現在では見られない献身の精神があったのに、今や世との妥協、真理の為に犠牲を払うのを惜しむ傾向、神の御旨に対する不服従などで満ちているのを示された(1T 127,128)。

1857 証

教会は生めるく、青年達の内、半分も悔い改めていない(青年への使命 p125;1T154~)。彼らは世俗的な事柄についておしゃべりするのは好きだが、神の真理が話題にのぼると黙って何も言う事がない。

1859 証

「ラオデキヤへの勧告は現時点における神の民にあてはまる事を私は示された。より大きな働きがなされていないのは、彼らの心がかたくなな故である」(1T 185)。

この年、什一献金が組織的にスタートしたのだが、再びラオデキヤの名称があてはめられている。

1860 証

「私は神の民の低い状態を見せられた。神が彼らから離れたのではなく、彼らが神から離れ、生めるくなったのである。彼らは真理の理論は持っているが、その救いの力に欠けている」(1T 185)。「教団の指導者達はプライドがありすぎてホワイト夫人の勧告を受け入れようとしない。幻は信じると公言するが、自分が譴責されるとそれはホワイト夫人自身の意見だと言って、神からのものとして受け入れない」(同283)。

※この年、SDAの名称が採用されるに至って教会はいよいよ組織としてまとまってきた筈なのだが、既に預言の宝に対する不信が根を下ろしていた。

1861 証

「パーティー、見せ物のたぐいは神が禁じられているのに、多くがこれらは健全な娯楽だと軽く考えている。信徒達はファッションを偶像にしており、牧師達の多くはジェームス・ホワイトに敵対心を抱き、不一致、批判の精神で満ちている」(1T 269~)。

※この年、初めて教会組織の基礎がしかれたが、思想的にはかなり分裂していたようだ。

1862 証

「私は今日のイスラエルについて憂慮

させられる。…彼らは眠り込んでおり、世に妥協しすぎていて誰が神に仕える者で誰がそうでないのか見分けがつかない。キリストとその民の間は離れ、世と彼らの距離はいよいよせばまっている。キリストの信仰を言いあらわす者達と世人との違いをあらわす特徴はほとんど失われてしまった。古代イスラエルのように彼等はまわりの国々の偶像礼拝に倣っている」(1T 277)。

※この年、六つの州に部会が設立され、ミシガン部会では教役者に初の給料が支給されたのだが、繁栄の裏には世との妥協が。

1863 証

「牧師も信徒も靈性に欠ける。すべてふるわれるべき者はふるい落とされる」(1T 355)。

※この年総会が組織され、健康改革の幻も与えられた。当時の教会員は牧師が約 30 名に信徒 3500 名である。

1864 証

服装改革の必要…「正しく四肢を被っている女性は千人に一人もない」(1T481)。当時の流行は長過ぎ、膨らみ過ぎ、重過ぎで非健康的であり、その正反対の流行であるアメリカン・コスチュームは男性的なスラック

スのファッションで、これは慎みがなく、多くの性犯罪を招く事になる。

1865 証

SDAは健康改革を怠っており、味覚と食欲とが彼等の偶像になっている。健康改革は第三天使の使命の一部であり、神の民は大いなる叫びを伝える準備が出来ていない。また牧師達は高慢で「愚かな安息日遵守者達は牧師を賞賛する事によってサタンを喜ばせている」。「決して牧師に面と向かってほめ言葉を使わないように」(1T 475)。

※この年、再び健康改革の幻が与えられて医療機関を設立すべき事が示された。健康に関するパンフレットがさっそく出版され、翌年にはバトルクリークに小規模なサニタリウムがオープンするのだが、信徒達のテーブルからは、まだエジプトの肉鍋が姿を消してはいなかったようだ。

1867 証

若者達の内「20人に1人も経験を伴った宗教を知っていないのを見せられた。彼らはいつでも何か変わった事、娯楽に対する自分たちの欲求を満たしてくれるものを追い求めている」(IT 500)。「写真や音楽が若者の偶像にされている」(青年への使命 p319)。

1868 証

道徳的退廃…「健康がすぐれない信徒の為に祈るよう頼まれたが、幻で彼が自慰行為に溺れているのを示され拒否した。大人も子供もこの悪習慣の虜になっている。再臨を待っていると公言する者達ですらサタン以上に準備が出来ていない」(2T349; 家庭の教育 p486)。「信徒達は夫以外の男性に家庭の問題をうち明けたり、妻以外の女性にうち明けたりして多くの罪を引き起こしている」(2T300,89)。「神がその民の滅びるのを望んでおられないのがこれほどまでの(再臨の)遅延の理由である」(同149)。

1869 証

「かつてのイスラエルのようにこの教会は光から離れ、義務を怠り…神を汚した。…誇り、快樂を愛する心、罪が彼らの内にあり…キリストは彼等を離れ去られた。聖霊はこの教会からしめ出された」(2T 441)。

1870 証

「私に示されたところによれば今真理を信じると公言、している人々の内、ほんの少数しか救われない」(2T 445)。

※ 1870 年春、世界総会本部であるバトルクリーク教会は 400 人以上いた教会員がたったの 12 名にまで肅清された。

1871 証

「安息日の大部分を寝て過ごすのは神の不興を買っている」(2T704)。牧師達の不一致…ジェームス・ホワイトに対する不信と、つぶやきが後を絶たない。

1873 証

「まことの証人の明らかなメッセージも効を奏していないのが示された。…多くの者はどうしてこんなに譴責ばかりよこすのだらうといぶかる。どうして証の書はいつまでも我々を背教しているだとか、恐るべき罪を犯しているなどと責めるのか。我々は真理を愛しているし、発展しつつあるし、こんな警告や譴責は必要ない、と。神の民が今や靈的盲目状態にある最大の理由は彼らが正されようとしない事である。証の書の警告と譴責に対する不信は神の民から光をしめ出しているのを示された」(3T 254,255)。

1875 証

「サタンの主な働きは我々の教団本部においてなされている。彼は責任のある立場にいる者を墮落させるのに努力を惜しまない。…これらの人々は砦を敵の手に明け渡す裏切り行為をしている。」「証の書に対する神の民の信仰を弱めるのがサタンの計画である。次に我々の信仰の柱石の一つ一つに

対して不信を抱かせ、更には聖書に対する不信、そして破滅へと導く。」

「一度信じていた証の書を疑い、拒むようになる人はそこでとどまらないのをサタンは知っていて、その人が公に反抗し、救いようがなくなるまで努力を倍加する」(4T 210,211)。

※この年、SDA初の教育機関バトルクリークカレッジが開校した。その前年から建設は始まっていたが、田舎に建てよというホワイト夫人の幾度もの勧告はしりぞけられバトルクリーク市内で工事が開始した時、彼女は泣かれた。しかもそれまでバトルクリークで塾を開き原則に忠実だったウッドロー・ベルの代わりに、当時 SDA で大学卒の資格を持っている唯一の人物であったシドニー・ブラウズバーガーが学長に選ばれた(ジェームス・ホワイトは29週間、エレン・ホワイトは約3年間の学歴しかなかった当時の事である)。ようやくスタートしたカレッジはホワイト夫人が望んでいたものとは程遠い内容だった。労作教育は皆無に等しく、30いくつある学科は他の大学と変わらず、ただ聖書が申し訳程度に上級生の夜のクラスとして週に何度かあるだけだった。

1879 証

「彼らは時々まどろみから目を覚ますが、また更に深い眠りへと引き込まれる。…彼らがはっきりと目を覚まさない

ならば神は彼らに与えた光と恵みを取りさられる。神はいきどおって燭台をその置いてある場所から取り除かれる」(4T 286)。

※この年、教団第二の病院セント・ヘレナサニタリウムがカリフォルニアでオープンし、西海岸での働きも目覚ましく進捗しつつあったのだが、教会の靈的狀態はいよいよ深刻になりつつあった。

1881 証

「神の忍耐にも限度があり、多くの者がその限度を越えつつある。」「最も大いなる光と特権を与えられていた者達が悪に染まっていく事実には震撼させられる。」「(エゼキエル9章引用)教会すなわち主の聖所が最初に神の怒りに触れる。老人すなわち神が大いなる光を与えた民の靈的指導者達はその信任を裏切った。…時代は変わった。」「大いなる光を与えられ、福音宣伝に伴う力を体験した者達から主が離れる時、主は快くそれをなさるのではない。彼らはかつて主とともにあり、主に導かれる忠実な僕だった。しかし彼らは主から離れ、他の人々を誤りに導き、神の不興を買っている」(5T 211)。

※この年、バトルクリークカレッジでは道徳風紀の乱れが特にひどくなった。卒業生の殆どは教会を出て公立学校教職に就き、在學生はミシガン大学アン・アーバー校に転校していく者が

多かった。ブラウズバーガーは辞任し、アレクサンダー・マクラーン教授に替わったが、この学長はSDA信徒でもなかった。何故彼が推薦されたか？当時としては貴重なPh.D（博士号）を持っていたからである。

1882 証

「イエスが今日、御自分の弟子であると公言する者達を御覧になる時、感謝の無さ、中身のない形式主義、偽善、不誠実、パリサイ的虚栄心、背教を見られる。」「人々が神から離れるにつれ、証の書に対する不信が確実に高まってきたのを私は見せられた。その傾向は教会のいたる所で見られる。」「証の書は読まれず、快く思われていない。」「牧師達の多くが汚れている。彼らの心は腐敗し、その手は清くない。」「幻の中で「私はバトルクリーク(世界総会本部)にいるように感じた。そこはあなたがたの委員会の最中だった。私はそこで語られた言葉を聞いたが、もし神が許されるなら永久に記憶から消し去りたい内容だった。…ある事柄については述べる事ができない。この事に関して誰にも知らせてはならないと止められたからである。多くの事が更に進められようとしている。」「教会はその指導者キリストに従う事をやめ、確実にエジプトに後退しつつある。」「しかし一般にこの教会は成長しつつあり、繁栄と平和がすぐそこまで来ているものと考えられている」(5T 217)。

※ 1882～83年の間、バトルクリークカレッジは開校七年目にして遂に閉校を余儀無くされた。一方、より証の書に従ったPUC（当時ヘルズハーグアカデミー）とAUC（サウスランカスターアカデミー）の2校がそれぞれベルとブラウズバーガーによって始められた。同年3/28、ホワイト夫人はR & H編集長ユライヤ・スミスあてに「重要な証」と題して譴責を送り、それを指導者達の前で読むよう言った。その要求は拒まれたが、譴責の内容は教育改革と健康改革の訴えだった。更に6/2、再び「証の拒否」と題して今度は世界総会へ別の勧告を送ったが、「神はあなたがたの好む惑わしをあなたがたが信じるままにまかされる。」「これ以上民の間に預言はなくなり、民を覚醒させた声は彼らの眠りをさます事ができなくなるかもしれない」と結んだ。

1883 EV697

「我々をこの罪と悲しみの世にこんなに長くひきとめているのは不信仰、世俗の精神、献身の念の無さ、そして主の民と称する人々の間の争いである。」「キリストの再臨がこのように遅れることは神のみ旨ではなかった。神はその民イスラエルが荒野で40年もさまようようにとは計画されなかった。神は彼らをカナン之地へまっすぐ導き、そこに…永住させようと約束された。しかしそれが最初に約束された者達は『不信仰のゆえに』その地に入る事をしなかった。彼らの心はつぶやき、反抗、

そして憎しみで満ちていたので神は彼らに対するその契約を果す事がおできにならなかった。…同じ罪が現代のイスラエルが天のカナンへ入る事を阻んでいる。」

※翌 1884 年、ホワイト夫人はユライヤ・スミスがまだ悔改めておらず、証の書を受入れようもしないのは、肉食の為に判断が狂っているせいだ、と書き、世界総会総理ジョージ・バトラーも肉食を改めていないと譴責した。当時、まだ SDA の各教育機関、医療機関では肉食が主だったようで、牧師や医者達もまだ健康改革を実行してはいなかった。しかしホワイト夫人自身も完全菜食に切り替えたのは 1894 年、オーストラリアでの事であり、指導者達は彼女もまだ食べているではないか、というのを言い訳にしていた。

1886 SM376,377

「我々は神が望んでおられるような状態とはかけ離れている。」

1887 COR32

「この恐ろしく厳粛な時代における我々の状態とはどのようなものだろうか？ 悲しい事に何という虚栄心、何という偽善、何という衣服や快楽への執着心、何という競争心！」

※ 86,87 年とロシアやアフリカを初めとする世界伝道が展開していったの

だが、教会全体はもう引き返せないほど、ラオデキヤ状態に陥っていた。

長々と引用したが、これだけ譴責が並ぶとよっぽどホワイト夫人がやかましく悲観的な人だったのか、それとも教会がよっぽど墜落していたのか考え込んでしまう。何しろ、これでも「教会への証」のごく一部を要約しただけであり（教会に良い評価が与えられているのはどんなに多く見積もっても半分以下である。そもそも「教会への証」が書かれたのは教会を正す為であった事を考えればごく当然だろう）、ホワイト夫人はこれ以外にもレビュー&ヘラルド、ユース・インストラクター等といった定期刊行物や個人的な手紙でさらに数多くの叱責を与えている。あまり公にはされないが、記録によれば総理を含む世界総会の指導者の面々でさえ、何度も名指しでホワイト夫人に叱られ、しかも往々にしてそのメッセージに反抗し、これらの勧告はホワイト夫人の個人的手紙だと言い逃れていたものであり、一方ホワイト夫妻もマネジメントの面でいつも理にかなった行動をとっていたとは限らないのである。いずれにしろ再臨をこれだけ遅らせたのは事実であり、誰が悪い、というよりは教会の連帯責任としてとるべきだろう。教会は熱心に待っていたのに再臨はなかったのではない。当時の教会が再臨の準備も聖霊を受ける準備もできていなかった事は明らかである。やはり聖霊をとどめていた理由があったのだ。しかも更に驚くべき事実が教会歴史には秘められていた。

第四章

1888年の謎

さて、更に歴史をたどり続けた私は実に驚くべき発見をした。ある時を境に次のような言葉が預言者によって語られ始めたのだ。

「今や試練の時が来ている。第三天使の使命の大いなる叫びは、罪を許したもうキリストの義が示された事によって既に開始されているからである。これが全地を栄光で満たす天使の光の始まりである」(1SM 363)。

「第三天使の大いなる叫びは罪を許したもう贖い主、キリストの義が現れた時に、既に始まっていた。これこそ全地を栄光で満たす天使の光の始まりである」(RH 1892 11/22)。

ここで「キリストの義が示された」と言うのは、かの有名な1888年ミネアポリス世界総会での出来事を指しているのだが、この時から大いなる叫びが始まったとある。大いなる叫びは後の雨をもたらすのだから、当然、後の雨も降り始めた事になる。もしこれが本当だとすれば、「全ての汚れが清まるまで」聖霊降下は無い、との先の言葉はどうなったのだろうか。その時点で完全に清まった人々が出現したのだろうか。

一体何が1888年の世界総会で起こったのだろうか。記録によれば、A.T. ジョーンズとE.J. ワゴナーというサインズの編集長をしていた二人の青年牧師が「信仰による義」をかつてなかった程正しく説き、一大リバイバルを巻き起こしたとあるが、それほどの影響を及ぼした彼等のメッセージはどのようなものだったのか。それはかつてマルチン・ルターが説き、今日我々もよく耳にする「信仰による義」とは異なるのだろうか。一つはっきりしているのは、ルターや我々の「信仰による義」は後の雨をもたらしていないという事実だ。

「ワゴナー兄弟がミネアポリスでこれらの考えを提示した時、私が聞いた限りではこの問題に関して人間の口から語られた最初の明確な教えであった」(MS 5,1889)。

ジョーンズとワゴナーの「信仰による義」は99%の教会員がラオデキヤ状態にあった当時（少なくともホワイト夫人はそう証言した）、1888～1893年のSDA教会に後の雨をもたらした。そして「完全な清め」が後の雨に先行しなければならぬなら、1888年のメッセージには「完全な清め」の謎を解く鍵があるのかもしれない。それは取りもなおさず、99.9%以上(?)の信徒がラオデキヤ状態にある今日のSDA教会にも、希望と可能性を与えてくれる慰めのおとずれと言えるだろう。

「主はその大いなる憐れみのうちに

ジョーンズとワゴナー兄弟を通して自分の民に最も貴重なメッセージを与えられた。…民がちょうど必要としていたものを、神は使命者達に与えられた」(TM 300)。

「A.T.ジョーンズとE.J.ワゴナーによって我々に伝えられたメッセージは、神のラオデキヤに対するメッセージである」(手紙 S 24,1892)。

当時の社会情勢を歴史的に見ても、何かが起ころうとしていたのは事実である。

「危機が世界に臨もうとしている。歴史上最も重大な願いが我々の目前にある。預言されていた事件が今や我々の目の前で展開しつつある」(5T711)。

「宗教由由を拘束しようとの働きが今なされつつあるのを我々を見る。日曜問題は多くの関心を集めている。憲法改正案が国会で盛んに討議されているが、これが通れば必ずや迫害が起こる」(RH 1888 12/18)。

この年、合衆国国会においてニューハンプシャー州代表上院議員ヘンリー・B・プレイヤーは日曜国家休業令及び憲法改正案を提出した。これを強力に支持したのがメソジスト、長老派、バプテストの各教派並びに酒類取締り法を提唱する教会団体であった(1880～1890年までの間に130人のSDAがカリフォルニア、テネシー、ジョージア、アーカンソー州法により逮捕、投獄、

罰金という刑を課された)。ジョーンズはミネアポリスでの総会が終ると、すぐその足でワシントンD.C.へ向い、米国内閣教育及労働委員会で反論し、議員達の説得に努めた。

「我々がこんなに長いこと怠ってきたこの働きを完成するまで、この災害が遅らされるよう熱心な祈りが天に届かねばならない。恐らくは神の民が目をさまし、光を掲げる為の猶予がまだ与えられるかもしれない」(5T 714)。

もしこの時に教会が「信仰による義」のメッセージを理解し、受け入れたなら「働きは山火事のように広がり」「最終使命は急速に」伝えられる筈だった。

この重大な時にもたれたのがミネアポリス世界総会だったが、ジョーンズとワゴナーのメッセージはそこでどのような反響を呼んだだろうか？ ホワイト夫人はこう証言している。真理を「調べようとするよりは反対しようというのがこの総会の雰囲気だった」と(MS 95 1888)。

「兄弟達よ、私はあなたがたの危険が見えるので警告したい。…もし牧師達がこの光を受け入れないなら、私は信徒達にチャンスを与えたいと思う。もしかしたら彼らはそれを受け入れるかもしれない。…丁度ユダヤ人がそうだったように」(MS 9 1888 10/24)。

この光に対して当時の指導者達は、

①多くの反対者、②中立、③少数の賛成者といった三つのグループにわかれた。反対派は世界総会総理ジョージ・バトラー、総会書記ユライヤ・スミスを筆頭にミシガン部会総理バンホーン、ヨーロッパ部会総理コンラディ、アイオワ部会総理モリソン、バトルクリークカレッジ学長リトルジョン、オハイオ部会総理アンダーウッド、テキサス部会総理キルゴアー等であり、他にも多くの代議員たちがジョーンズやワゴナーに好感を持っていなかった。何度かにわたるホワイト夫人の仲裁と、強力な支持がなかったなら、ワゴナーとジョーンズのメッセージは静かに葬り去られただろう（総会中の、両氏の講義は速記されていたものの、他の報告と一緒に総会ブリテンに載せられなかったという事実がある）。しかしこうなる事を6年も前からホワイト夫人が預言していたのには更に驚かされる。

1882

「主は学識があつて名誉ある人々を拒まれた。…神は今日、多くの者が予想もしていないような働きをなさろうとしている。主は教育機関での外面的訓練よりも、聖霊によって教えられた者を起こし、高められる」(5T 82)。

「知性、機転、能力に頼ってきた者達は先頭に立たなくなる。…最後の厳粛な働きに多くの偉大な人物は参加しない。」

「外面的には荒削りで、魅力に乏しい人物の内に真のクリスチャン品性の輝きが現わされるようになるかもしれない」(5T 80~81)。

※この年、27歳でバトルクリーク・サニタリウム¹の医者だったワゴナーはPUCでのキャンプミーティング中に新生を体験し牧師を志すようになり、同時に信仰による義を研究し始めた事は単なる偶然ではないようだ。

1885

世界総会総理と他の指導者達が「自分達の任務に目覚めない限り、第三天使の大いなる叫びが聞かれる時に、彼等は神の働きを認める事が出来ないだろう。地を明るくする為に光が輝く時、主の働きを助ける代りに自分達の狭い考えでそれを縛ろうとするだろう。…働き人達は主が御自分の義の働きを成し遂げる為に用いられる単純な器に驚かされる」(TM 300)。

この年、35歳の元陸軍上等兵ジョーンズは数年の牧会経験の後にワゴナーと共にサインズ編集長に抜擢され、信仰による義を説き始めたのもまた、偶然の一致ではなかったようだ。

さて心配した通り、指導者達が快く受け入れないのを見たホワイト夫人は自らジョーンズ、ワゴナーと共に地方を廻ってはリバイバル集会を持ち始めた。

「世界総会以来の各集会において人々はキリストの義の尊いメッセージを熱心に受け入れた。…今こそ、恵みの機会と特権の時である」(RH1889 7/23)。

「私はキリストの義のメッセージが説かれている集会をあちこち訪れた。私は兄弟方(ジョーンズとワゴナー)の側に立ち、この時代に対するメッセージを証しできる事は特権だと思った。またこのメッセージが語られた所はどこでも神の力が共にあるのを感じたのである」(RH 1890 3/18)。

「私はリバイバルの働きがこれほど徹底的に行なわれ、それでいてなお過度の興奮のない集会をこれまで見たことがなかった。特に強く勧めたり、招いた訳ではないが、…正直な人々は罪を告白し、自分の知る限り悔改め、正すべき事は正して神への実を結んだ」(RH 1889 3/5)。

それまでホワイト夫人は特定の人々の働きをこれほど高く評価した事はなかったので、ベテラン指導者達の間には嫉妬心が起こったのも無理からぬ事かもしれない。

ともかくこれらのリバイバルも指導者達の間を開く事は出来なかったようである。

「神が人々を覚醒させようと働いておられるにもかかわらず、彼らは警告、譴責、懇請の使命をわきに押しやろうと

する」(RH 1889 8/13)。

「指導者達はいつまで神のメッセージに無関心のままでいようとするのか」(RH 1890 3/1)。

「神はこの時代のためのご自分の仕事をなさろうとして使者達をお召しになった。しかし、すでにある人々はキリストの義のメッセージに背を向けそれを伝達する人々を批評している」(RH 1890 5/20)。

「神はその民に悔い改めて彼らの最初の仕事をするよう覚醒のメッセージを送られた。しかし神のメッセージはどのように受け入れられただろうか。耳を傾ける者もいたが、他の者は取り合おうともせず、そのメッセージと使者を非難している」(RH増刊号 1890 12/23)。

不信はさらにジョーンズとワゴナーを支持してやまないホワイト夫人にも向けられた。

「(以前)あなたがたはホワイト夫人の正しさに確信をもっていた。しかし今はどういふわけか、ホワイト夫人に対するその信仰が変わってしまった」(MS9 1888 10/24)。

「私からの証をこれほどたくさん受け取ったにもかかわらず、そのメッセージを拒み続けるこの教会に対し、働きかけるだけの力を私は持たない。…私がこれ以上何を言っても状態が良くなるとは思わない。彼らは神の霊の訴え

を退けた。彼らのかたくなさを打ち砕くための力を神がこれ以上持っておられるとは思わない。…私は未信者に話すほうがずっと気楽である。彼らは興味を示し、それらが神の靈感によって語られた言葉のようだと言う。ああ、多くの光を与えられた指導者達がいるその場所こそ、世界で最も語るのが困難な場所である。彼らは真理を示されたが、光より闇を選んだ。そのかたくなな不信の結ぶ実がどのようなものか明らかにするのはこれからである」(手紙 1890 9/18)。

これ以上の譴責に耐えられなかったかのように 1891 年世界総会はホワイト夫人を開拓中のオーストラリアへ派遣し、翌 1892 年にワゴナーはイギリスへ送られた(ジョーンズは総会の翌年から世界総会の膝元バトルクリークカレッジに転職配置され、一部の指導者達は彼のクラスの内容まで干渉しようとした)。オーストラリアへ向かうホワイト夫人はこの世界総会の決定は「主から何の光も与えられていない」と日記に書いたが、後に幻でオーストラリア滞在が無駄に終わらない事を約束され、勇気を出して太平洋を渡った。それから 8 年余、彼女は誰にも邪魔されずに真の教育をアボンデールカレッジにおいて実演させ、1888 年のメッセージの強調点を次々と「キリストへの道」(1892)、「祝福の山」(1896)、「各時代の希望」(1898)、「実物教訓」(1900)の中に著わした。一人アメリカに残されたジョーンズは 1893 年の世界総会でも「信仰による義」を説き、ワシン

トン D.C. ではプレックリッジ下院議員らによって再び盛り返してきた日曜休業令案を国会で論破し、シカゴ万国博覧会における日曜休業案を未然に防ぐという孤軍奮闘ぶりをみせたが、ついにリバイバルは教会全体に行き渡らなかった。1892 年にホワイト夫人は、もし教会が 1888 年のメッセージを受け入れていたなら今頃は天国にいたであろうと書き、1893 年には教会が神の勧告を聞かず、天の燭台が彼らを照らさなくなる時、彼らは自分でともした明りに歩むだろう、と預言めいた言葉を残された(RH 1893 4 月)。以後、彼女の言葉を追ってみると過去、現在、未来に関して三つの事が言われているのに気づく；

①我々が 1888 年のメッセージを受け入れたら天国に行けた筈だったという事。

②まだそのメッセージを受け入れておらず、それが受け入れられるようになるには組織の改革が必要であり、一部の要職にある指導者達の権限で光を葬り去ってはならないという事。

③しかし聖霊に従う働き人達がいずれ現れて、このメッセージを広く伝えるだろう、という事である。

1895

「すべて聖霊の感化に服従する者、人

間的な機構や自由を奪うその規定、その控え目な方法を棄てる者に、聖霊は注がれる。彼等は聖霊の力によって真理を宣言する」(RH 1895 7/23)。

「何故そんなにジョーンズとワゴナー兄弟を憎むのか。…あなたがたがこれらの人々の伝えたメッセージを拒む時、そのメッセージを与えられたキリストを拒んでいるのです」(手紙A 51,1895)。

1896

「神と共に働くとはどのような事かを体験的に知っている啓発された人々が、我々の内に現れるまで全地をその栄光で満たす聖霊の大いなる降下はない」(RH 1896 7/21)。

真理を「持っていると言明する者達が主の命令通りに義務を果していたなら、全世界は今より以前に警告され、主イエスは…来られたであろう」(RH 1896 10/6)。

「光に抵抗して受け入れようとしない人々に警告する。神の遣わされた義の使命者をいつまで憎み、さげすむのか。神が彼等にメッセージを託された。彼等は主の言葉を伝えたのである。」(TM 96,97)「先入観をなかなか棄てず、この真理を受け入れまいとする彼等(指導者達)の強情心がワゴナー、ジョーンズ両兄弟を通しミネアポリスで与えられた主のメッセージに反

抗させたのである。敵対心をあおる事によってサタンは神がその民に与えようと望んでおられる聖霊の特別な力を締め出してしまった。ペンテコステの使徒達がしたように、彼等も真理を世界中に伝える事が出来たのだが、それを可能にする力を敵は阻んだ。世界中を栄光で照らす光は拒まれ、我々の兄弟達の行動によって締め出された」(1SM 234,235)。

1897

「何故兄弟達は助けになる事ができるのに妨げとなり、押し進める事ができる時にブレーキをかけ、自分の魂からも…他の人々からも祝福を奪い去るのか」(TM 413)。

1898

「世に対する憐れみのメッセージを伝える事によって神の御計画が実行されていたなら、キリストは地球に来られ、既に聖徒は神の都に迎え入れられただろう(オーストラリア部会記録 1898 10/5)。

20世紀を迎えて教会は信徒数も膨れ上がり、外面的には発展し続けるのだが、未来を既に見通していたかのようには預言者はこう警告した。

「我々はイスラエルの子らが経験したように不服従の為に、これから長い年月の間、この世にとどまらねばならないかも知れない。しかし神の民は自

分達のあやまちが招いた結果を神の責任にする事によって更に罪を重ねてはならない」(P.T.マギヤーンへの手紙 M-184,1901)。

すべてはあの運命の 1888 年、再臨を早めるか遅らせるかという重大な岐路に立たされた時、教会が後者を選んだ事に始まった。そうする事によって我々はキリストが与えられた信任を裏切り、しかも再三の預言者の訴えにもかかわらず、その罪を悔い改めようとしなかった。「既に神の都に迎え入れられていた」筈の年から 94 年たった今なお教会はその働きを終える事が出来ず、若い世代は SDA の存在する理由もその使命も、そしてかつてどれほど再臨が近付いていたかも知らずに、今日も教会を離れて行く。

神の訴えを組織として拒んだ我々は以後、何度かの霊的覚醒を経験しながらも、完全に立ち直る事が出来ずに今日に至っている。背教によって幕を開けた 20 世紀、教会にも世界にも多くの変化が訪れた。詳しい事は次の機会にまわすが、教団最大の機関だったバトルクリーク・サニタリウム、レビュー&ヘラルド社、パシフィックプレス社が次々と「天使の炎の剣」によって滅ぼされ「アルファ」と呼ばれた大背教により医者、牧師、教団指導者を含む 400 人余りのグループもろともサニタリウム、健康食品事業が教会から失われるという打撃を被り、教育改革の拒否による認可制度の導入とそれに伴う諸問題、健康改革の拒否が引き起こし

た医事伝道の変化、そして預言者の死…。これら一連の出来事は我々のたどった道が神のみ旨から離反したものであったことを明らかに示している。

同時に世界は福音に対してその門戸を閉じ始めた。パスポートなしで世界中どこへでも行けた時代は終わった。無神論共産主義によって世界は東西に分割され、空前の規模で行なわれた世界大戦によって海外伝道は麻痺し、それに追い討ちをかけるように全世界を襲った大恐慌、進化論及びモダニズムの浸透、道徳的退廃と無思想無主義のカルチャー世代…このような時代になったから伝道が進まないのだと嘆く前に、このような時代になるまで再臨を遅らせた我々の責任を思いみるべきだろう。恵みの期間に働きを終わらせる事を拒んだ教会は、今や「最も困難で、失望的な状況下でその働きをしなければならぬ」(5T 463,1885) という預言者の言葉を成就しつつある。

日本の教科書問題をあげるまでもなく、歴史とは必ずしも美しいものではない。しかし現状の解決を望むなら、勇気をもって過去を振りかえるべきだろう。何故今、教会に力がないのか、なぜ聖霊の力に欠けているのかという疑問の解答を得ようと思うなら、脚色されていない歴史を読む必要がある。そして我々は必然的に 1888 年に行きつく。こよなく愛した教会に譴責ばかりを書き送らねばならなかった預言者の 71 年間のキャリア中、最高の賛辞と励ましが送られた異例の数年間…そ

ここに何かがあるに違いない（厳密には1888 - 1897年までにホワイト夫人はジョーンズとワゴナーを支持する言葉を200回あまり書いている）。重大な何かサタンへの必死の努力によってもみ消されたような痕跡を記録は残している。もし我々がその失われたものを見出し、受け入れて自分のものとするなら、今からでも再び後の雨を受ける事は可能に違いない。あと何年後と言わず、今からでも再臨に備える大リバイバルは起こるに違いない。アドベンチストの若い世代はこれまでの矛盾、不満の解答をそこに見つけるに違いないのである。今、我々の関心はこの一点に絞られる。1888年にジョーンズとワゴナーは何を伝えたのか。そしてSDA教会は何故それを拒んだのか…。1888年にジョーンズとワゴナーが伝え、ホワイト夫人が支持したメッセージがどのような点においてユニークであったかを知るには、従来のSDAの義認観と、比較的新しいネオ・アドベンチズムの義認観、そして、1888年の使命者たちの義認観を比較する必要がある。聖公会神学者ジェオフリー・バクストンの著作「SDA神学の動揺」（1977）にも明らかなようにSDA神学は信仰による義という救いの大原則の理解において一致しておらず、しかも近年ますます分裂化していく傾向にある。まさに様々な教理の風が吹きまくる現代において、正しい信仰による義の理解を持たずにいる事は嵐の中で錨を失うことに等しい。

現存するジョーンズやワゴナーの著書、説教集や記事の抜粋に目を通し、

1888年についての研究者たち(R.J. ウィランドやD.K. ショート等)の論文のいくつかを一読しただけで、神学者ではない私にも事の重大さが一目瞭然にわかった。この二人の説いた信仰による義は、当時は勿論、今日の教会にとっても爆弾宣言に等しい革新的メッセージであり、そのユニークさは先の二つの義認観と比較すると明らかだ。

A 伝統的 SDA の解釈

信仰によって義と認められ、行ないによってその義を裏付ける事によって人は救われる。

B. 福音主義的 SDA の解釈

信仰によって義と認められた人には行ないという実が伴う。

C. 1888年の解釈

罪人は信仰によって義人につくり変えられ、罪の支配から救い出される。

まずA、B二つの解釈の説明と分析を試みたい。

A. 伝統的 SDA の解釈

罪人はキリストの十字架を信じ、罪を悔い改めて告白する事によって過去の罪を許され、神に受け入れられる。この瞬間から人間には服従という条件付きで永遠の命が約束されるが、まだ

天国へ行くにはふさわしくないので、毎日の聖化というプロセスが始まる。しかし人間の力だけでは律法を守る事は不可能であり聖霊の助けが必要である。熱心に求める者には聖霊の力が与えられ、その人自身もできるだけ律法を守るように努力する。こうして最後までその努力を続ける者が調査審判に合格する。不完全な部分はキリストの義によって補って行かねばならないが、知っていて告白しない罪、示されながら勝利しようと努力しない罪はキリストの義で被われない。故に光が与えられれば与えられる程自分の努力を要求される部分が増え、その分テストは厳しくなる。

A の解釈の分析：

伝統的に信じられてきた理論が必ずしも正しいとは限らない。第一にこの神学は神の品性を正しく表わしていない。ここで提供されている救いは値なしに与えられる賜物ではなく、あくまでもトレードにすぎない。神に何かを期待するには、まず罪人の方から何かしなければならぬ。罪人が信じて告白すれば、その悔い改めを認めて神が許しを与えられる。罪人が熱心に祈り求め続けるならその真剣さを認めて、神が聖霊の助けを与えられる。罪人が聖霊と協力して律法や証の書に従い、ベストを尽くすなら神がその努力に報いてどうしても出来なかった分は補って下さり、永遠の命を与えてくださる。結局「信仰+行いによる義」で、人の救いは本人の努力や真剣さ、忍耐にか

かっているものであり、そこには平安、救いの確証といった福音的要素がうすい。確かに律法に従わせるかもしれないが、その服従は永遠の死に対する恐れと永遠の命に対する執着という、極めて利己的な動機に根ざしている。

「このような人たちの心はキリストの愛に強く動かされたものではありません。天国に入る為に神が要求したものであるから、という訳でクリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教は何の役にも立ちません」(キリストへの道 p53)。

この考えが SDA の大半を占めるようになったのは、恐らくそれが教会を一致させるのに役立つ為だと思われる。つまり「我々は残りの民だ」「神の戒めを守っているのは SDA くらいのもんだ」という自尊心をくすぐり、SDA である事の意義と誇りを与えると同時に、「SDA でなければ救われない」、「安息日を守らなければ失われる」といった脅迫観念が教理や標準、組織に対する教会員の忠誠を維持するのに効果があったことは確かだろう。

B. 福音主義的 SDA の解釈

罪人はキリストの十字架を信じ、悔い改めて告白する事によって全ての罪を許され、その瞬間からいつでも天国に行ける。人は義人でなくとも、信仰さえあれば義人とみなされる。信仰に

よって義と認められた者は聖霊の内住によって、清い生活という実を結ぶようになる。しかしいくら義とみなされてはいても、実際には罪人のままである事に変わりなく、相変らず罪は犯すし、どんなに善を行なっても所詮墮落した人間のなす事であり、神の目には「汚れた衣」でしかない。故にどれだけ清められたか、どれだけ律法を守ったかは人間の救いを左右しない。罪の恐ろしさはその一つ一つの罪深い行為よりも、罪しか犯せない状態にあるのであって、墮落した状態にある我々はどんなに聖霊と協力して努力しても完全な義に達し得ず、最後までキリストの義によって被われなければならない。

キリストは墮落する以前の人間（罪を犯す以前のアダム）の性質を取って、我々の代わりに完全な生涯を全うされた。だから我々自身は完全を要求される事はない。

B の解釈の分析：

この神学はいかにも自己の行ないから目をそらして、神の恵みにのみ注視しているかのような錯覚を与えるが、実際は A の伝統的解釈と同様、自己に目が向けられている。「私はあの時信じたから大丈夫…」「私は今、信じているから救われる…」結局救いを信じるという自分の行為にかかっているとされ、しかも自分はもう許されたのだから、律法など気にしなくても良い」…言葉をかえれば「自分さえ救われれば、神が私に何を望まれるかなどは問題では

ない」という利己的精神が明らかである。また、この福音が必ずしも救いの確証と平安を与えるわけでもない。信者が救いの根拠として自分の信仰に目を向けている以上、「私は本当に信じているだろうか」「あの時の悔い改めは本物だっただろうか」「私の信仰は十分だろうか」等という恐れはいくらでも起こり得る。しかし何よりもこの神学の決定的な短所は、それが罪の解決に関する何の手掛かりも与えていない、という点だ。この福音は罪人に完全な勝利を約束も要求もせず、ただ許しに終始している。許され、少しずつ向上はしながらも、罪人は相変らず罪を犯し続けるしかない。つまり罪からの救いではなく、罪の内にある救いなのである。勿論再臨の時、完全な体に造り変えられる事によって、罪をもはや犯さなくなり罪の問題は解決するとされているが、今罪人が完全に勝利できないとすれば、将来それが可能になるという事も疑わしくなる。たとえそれが本当だとしても、どうせ最後で一瞬にして完全になるとすれば、何故今から苦勞して清まる必要があるだろうか。またどっちみち律法を守ってもそれが神の目に不完全であるなら、何故律法遵守にこだわる必要があるだろうかといった疑問は後を絶たない。“福音”もここまできると、SDA の存在する理由さえ危うくする。聖所も、調査審判も、安息日も、第三天の使命も必要なくなるか、少なくとも重要視されなくなり、「今何故 SDA か」について混乱させこそすれ、何の解答も与えてくれない。

以上の義認に関する SDA 内の二大解釈はどちらも罪の解決を提供していない。それらによれば、罪人は許されながらも罪を犯し続けるので、仲保者のとりなしを必要とし続ける。確かに「彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができる」（ヘブル 7:25）のであり、「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」（第一ヨハネ 2:1）のだが、同時に「これらのかたがたを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである」と聖書は断言している。キリストは永遠に聖所でのとりなしを続けるわけにはいかない。何故ならとりなしている間、キリストは再臨することができず、死人がよみがえらされる事もなく、その間この悲惨な罪の世界はますます墮落しながら流転し続ける筈だからである。いよいよ人口爆発を続ける人類が今の調子で罪を犯し続けるなら、キリストのとりなしはますます忙しくなる一方で、祭司職を閉業するどころではなくなるだろう。信仰によって義とされる者たちは第二の死を経験しなくて済むというだけで、痛み、苦しみ、悲しみに満ちたこの世界で生き続け、やがて死ななければならない。こうして次の世代、また次の世代、と“許された”義人たちはいつとも知れない再臨を待ちながら眠り続けることになる。果たしてこれが「救い」と呼べるだろうか？

否！聖書はキリストのとりなしが終わる、つまり救われるべき最後の世代の人々が罪を犯さなくなる事を明らかにしている。ダニエル書 7 章は 1844 年から始まった裁きが終了すると同時に、キリストが主権と栄光と国を受けている場面を描いている。この栄光のキリストはもはや大祭司ではなく、王として御自分の花嫁である教会を迎えるために再臨されるのだ。

「全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」（黙示録 19:6-8）。

最終世代は何としても罪の力から救われねばならない。第一部でのべた通り、再臨を早めるか遅らせるかは SDA にかかっており、SDA 教会が「後の雨」を受けて「大いなる叫び」を伝える時、再臨の道備えは終了する。そして我々が聖霊を受ける為には「完全」つまり「罪を犯さなくなる」状態に到達しなければならないのだから、伝統的 SDA の教えも、福音主義的教えも明らかに不十分である。残される道はひとつ、我々は勝利の秘訣を 1888 年のメッセージに期待しなければならない。もしここにも罪の解決が見つからないのであれば、これ以上 SDA が存在し続ける理由も価値もない。一般プロテスタントで

十分である（注：以下の項目は必ずしもジョーンズ／ワゴナーの言葉を文字通り引用してはいないが、彼らの主張の要点をまとめたものであり、1888年の研究者たちの結論とも照らしあわせて、その正確さに万全を期したつもりである）。

C.1888年の解釈

1. 罪人が何一つ良い事をせず、神を認めてもいなかった時、神はまず罪人を愛してこれに全てを与え、救いの道を備えられた。

2. 各時代にわたり、神は何とかこの愛をわからせようと努めてこられた。その愛を意図的に拒みさえしなければ、誰でも必ず神のもとへ引き寄せられる。神はあらゆる手段を通して今日も全人類を引き寄せておられる。

3. 救いは何処まで引き寄せられたかによらない。近くまで引き寄せられた者も、何かの理由で少ししか引き寄せられなかった者も、それを拒みさえしなければ救われる。

4. キリストは十字架によって全人類に現世と来世における生命という二つの賜物を既に与えられた。

5. キリストを信じようと信じまいと、知っていようと知っていまいと、誰でもこの世に生を受けたのはキリストの贖いのおかげであり、我々が恩恵を被っ

ているこの世の全てのものは、キリストの血によって与えられている（死だけが我々の主張できる唯一の権利であり、だからこそ現世の命も永遠の命もいつでも拒む自由が与えられている）。

6. この世での幸福、楽しみ、満足、笑いの一つ一つが、全てキリストの犠牲によって与えられているのであり、アダムの墜落以後、すぐに絶たれてもよかった筈の人類が今日まで生かされているのは、ひとえに十字架のおかげである。

7. 罪人は信じたり、何かする事によって義とされるのではない。何もしないうちから法的には既に全人類が義とされており、だからこそ存在する権利もなかった者達が現に存在しているのである。既に法的に義とされている為に、誰でも永遠の命を受けるにふさわしい身分を与えられている。

8. 永遠の命も現世の命も十字架の賜物であるとすれば、賜物とは価なく資格なしに与えられるものだから、信者、未信者を問わず、全人類に同様に与えられている筈である。

9. 義人と異邦人の違いは、前者はこの福音を聞いて信じた者、後者はまだ聞いていないか、聞いても信じなかった者、といえる。

10. 以上が「神の和解」の福音であり、SDAから見失われてはならない大原則

である。神が救おうとし働きかけるのを拒まなければ救われるのである。

11. この事実を聞いて拒みさえしなければ、それを信じる信仰が与えられる。

12. 与えられた信仰の度合に応じて、キリストの犠牲の大きさを知的に理解すればする程、神への感謝が自然と湧き上がる。

13. キリストの愛に感動した信仰は、同時に神の御子を十字架につけた自分の罪を必ず悔いる。悔い改めの深さは、先の感動の大きさに比例する。

14. 悔い改めた者はもはや自分の考えや好みに固執せず、神の御旨に反する自己の否定を望む（くだいようだが、この願いを起こさせるのも神である）。

15. 自我を十字架につける事を望む者は「古い自分に死ぬ」力が与えられ、聖霊に支配されて新しく生まれる。罪の性質が自分の内に残っていてもそれに支配されない。

16. 聖霊に支配されると、罪に支配されていた時悪を行なうのがたやすかったのと同様に、否、それ以上に今度は善を行なうのがたやすくなる。

17. このように外面に表わされた行いによって心の変化が全宇宙に実証さ

れ、神に栄光が帰せられる。

18. 今や、あらゆる善行はキリストに対する愛と感謝が動機となる。

19. 罪の性質はまだ残っており、内外からの誘惑を感じるが、毎日神の支配に自己を明け渡せば、罪を犯さずに済む。

20. 以上のように墮落した人間でも、信仰によって神の力を自分のものとするなら罪に勝利できることを、キリストは自ら実演してみせた。すなわち神の子は、罪人と同じ墮落した弱い性質をとって地上の生涯を全うし、我々の模範となられた。キリストは御自分の神性によって勝利されたのではなく、信仰の祈りを通して与えられた聖霊の助けによって（つまり我々にも可能な方法で）完全な生涯をおくられた。

21. キリストは今、至聖所で最後の贖いをする事によって、残りの民を全ての罪に勝利させようとしておられる。だから再臨は 1844 年以來 SDA の準備次第でいつでも起こりうる。

22. 何故神が我々の協力を待たれるかということ、強制的な、或いは無意識の内になされる清めというものはないからで、罪に対する一つ一つの勝利には我々の同意が必要とされるからである。

23. 神はまず我々の心を深く探り、今

まで我々が知らなかった（知らないのだから当然告白する事もできずにいた）罪を一つ一つ示される。我々がその光を拒まないで受け入れ続けるなら、神御自身が我々の内に始められた清めの業を遂に完成して下さる。

24. 清められた者から順に聖霊が下り、大いなる叫びが展開される。この最後の福音の働きとは、神の御品性が我々の生活に再現される事に他ならない。

25. 現代の真理（SDA 基礎教理）を踏まえた上でのこの信仰による義こそ「三天使の使命」そのものである。

26. 最終世代が完全に清まらねばならないのは、大争闘を終結なさろうとする神に協力する為であって、「神の裁き」において神の正しさと愛と救いの力を全宇宙に立証する為である。これは過去のクリスチャン達には与えられなかった特権であり、各時代を通じて何人かの完全な義人は存在したものの、一世代全体が神の品性を表わす事によって「全世界に、天使にも人々にも見せ物にされ」るのは、これが最初で最後である。

27. このようにして残りの民は、神の印であるその御品性を受け、仲保者なしに悩みの時を通過し、生きて天に移される準備ができる。この神の印を拒む者は必然的に獣の印を受ける。

28. 神の印が品性であるとするれば、SDA 教会にいて型ばかりの安息日を守っていても神の印を受けそこなうというのは可能であり、獣の印を受ける危険性がある。

29. 安息日は神の御言葉が何もなかった宇宙に天地を創造した事を記念する日であり、同じ御言葉が罪人に向かって義を宣言する時、（天地創造の時と同様）罪人を実際に義人に造り変える力を持つ事を保証する。故に安息日が論争点となる時、神が創造主か否か、そして罪人を義人に変える力があるか否かが、問われるのである。

30. 「天と地と海と水の源とを造られた方を伏し拝め」「ここに神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」という三天使の使命はこのような背景のもとに理解されねばならない。

31. 宗教改革者たちは靈魂不滅と予定説を信じていたので、キリストの十字架（第二の死）に表わされた神の愛と、救いの計画における神の公平さを十分に理解できなかった。また原罪という教理に縛られていたので罪からの救いを理解せず、聖所の清めも、大争闘における人間の役割も、安息日の意義も知らなかったので、信仰による義の理解が未完成のまま終わってしまった。

32. 彼らがやり残した働きを完成させ、福音の働きを終結させるといふ、

崇高な目的の為に起こされたのが SDA 教会なのである。

C の解釈の分析：

いかがであろうか？これを聞いて興奮しない人がいたら、その人は祈ってもう一度読み直すべきであろう。どの教派もどんな神学者も見出し得なかった真理がここにある。罪からの救いという一大ジレンマの解答がここで答えられている。何故罪に勝利する必要があるかの理由と、どのように勝利できるかという方法が明らかにされている。さらにその方法の確かさがキリストの生涯によって実証済みとあれば、これ以上完璧な神学はありえない。そして我々がこの真理を受け入れる時、この理論は単なる神学ではなくリアリティー（現実）となる。

何よりも注目したいのは、この義認観には神の品性が正しく表わされているという点だ。神がまず罪人を愛して救いを与えられた。だから今さら神に受け入れられよう、憐れみを受けよう、と努力するのは全く見当違いである。キリストの十字架は罪人に対する神の怒りをなだめるためではなく、神に対する我々の敵意、偏見、恐れを一掃する為のものだ。永遠に不変であられる神の愛は、人類が罪を犯す以前も犯した後も我々に対して全く変わらないのである。罪によって変化したのは我々であり、キリストは我々が失った神への愛情を我々の内に再生なさろうとしている。和解を必要としているのは人間

の側なのであり、その和解は何もむずかしいものではない。我々の心にある敵意という壁がキリストの愛によって溶かされる時、冷えていた我々の心に神の愛が流れ込み、それに文字通り圧倒されて罪人は回心、新生、献身、勝利、そしてついには罪を犯さない完全なまで引き寄せられてしまうのである。我々の曇っていた眼がこの事実が開かれる時、「救われる為にあれもしよう、これも我慢しよう」と考えていた自分の浅はかさ、「まだ救われないかもしれない」という恐れと不信、「これくらいまさか救いに関係するわけじゃあるまいし」という不遜さ、「再臨なんていつあるのかわからない」などと考えていた僭越さの一つ一つを恥じ入るようになる。それはまた「私はこれだけ律法を守ってきた」という誇りを砕き、「早く伝道しなければ今日も何千何万という人々が滅んでいく」というパニックから我々を解放する。しかし決して「人並みにしていれば…」というラオデキヤの自己満足にとどまらせず、「更に高い標準、更に厳しい自己否定へ」と駆り立てる。しかもその動機は恐れでも報いでもなく、神の愛の故にそうせずにはおれなくなるのである。愛に動機づけられた自己否定の生活はたとえようなのない満足と平安に満ちたものとなり、その感化力は世の人々に福音の力を納得させずにはおかないであろう。

（注）A.T. ジョーンズと E.J. ワゴナーが 1888 年にした説教は記録された。にもかかわらず、出版されなかったので残っていない。しかし次のような現存

の資料をもとに 1888 年～ 1900 年頃までの彼らのメッセージの骨子をつかむ事ができる。

GG「ガラテヤ書の福音」EJW/1888 (バトラー世界総会総理への公開状)

CHR「キリストとその義」EJW/1890 (1888 年の説教ノートをもとにして書かれたと思われる)

SR「ローマ書の研究」EJW/1891 (世界総会での講義)

GCB「1891 年世界総会ブリテン」ATJ/1891 (世界総会での説教)

GCB「1893 年世界総会ブリテン」ATJ/1893 (世界総会での説教シリーズ)

GC「創造の福音」EJW/1894

GCB「1895 年世界総会ブリテン」ATJ/1895

GT「良きおとずれ」EJW/1900

CCP「クリスチャン完全への道」ATJ/1905 (1888 年のメッセージのダイジェスト版)

EG「永遠の契約」EJW/ ?

BE「バイブル・エコー誌」

ST「サインズ・オブ・ザ・タイムズ誌」

RH「レビュー・アンド・ヘラルド誌」EJW&ATJ/1889-1900

第五章

地球最後のメッセージ

1888年のメッセージの中心はキリストであり、その福音は罪からの救いだった。彼等の主張は①信仰による義認、②キリストの人性、③完全、④福音、⑤聖所の清め等の分野に大別出来るが、各項目別にジョーンズとワゴナーの言葉をそのまま引用し、ホワイト夫人の言葉とも比較してみた。

I. 義認

1. 我々の義はキリストの内にのみ見出される。

「人間は、そして人間のなす行為はそれがどんなもので誰であろうと、信仰のみによって義とされます。律法は人間をその仕業に依じて裁きますが、律法の標準は途方もなく高いので、どんな人間であってもそれに達する事はできません。だからこそ仲保者を必要とするのであって、その御方によって義とせられねばならないのです。…この世で人間が必要としているのはただ一つ、義とせられる事です。そして“義とする”というのは実際的な行為で、単なる理論ではありません。…我々は過去の不完全な行いを完全としていただくのに、キリストの義を必要としているのと

同じく、今、義とされるのにもそれを必要とするのです」(EJW GCB 1891, p75)。

「どうして信仰によって義とされるという教理が、神の律法を軽視させると考える必要があるのでしょうか。…義とせられるというのは心に律法が確立される事です。…キリストは御自分の義を与え、罪を取り除き、御自分の義をそこに据えられます。これはその人を全く変えてしまうのです」(同上 p85)。

2. 義とせられる、とは義人に造り変えられる事である。

「“義とする”とは義に造り変える、或いは義である事を見せるという意味です。…罪深い人間の行いは彼を義人に造り変える何の力もないばかりか、かえって悪しき心から出た行為であるため、彼の罪深さを増すだけです。罪を重ねる手によって人は義とせられませんので、罪深い人間が自分の努力によって義とされようとするのは意味がないのです。彼自身がしようと望んでいる、そして故に要求されている善をなす為には、まず彼自身が義人に造り変えられねばなりません。…使徒パウロはすべての者が罪を犯し、神の栄光を受けられなくなっており、そのために律法の行いによってはどんな内なる者も神の眼に義とせられる事はないと証言した後、このように続けます『(我々は) 価なしに神の恵みにより、義とせられる(義に造り変えられる)』と。価なしに義人に造り変えられる…それ以外にどんな方法があるでしょう。…神が罪を

見逃されないというのは事実です。そんな事をして神が公正な御方でいられる筈がないからです。しかし神は遙かにまさった事をして下さいます。罪があるのにそれを見逃すという事をしなくてもすむように、神はその罪を取り除かれるのです。その人は義とせられて一度も罪を犯さなかったのと同じように見なされます…。(ゼカリヤ3:1-5)汚れた衣を脱がせるというのは、人間からとがを除くというのと同じ意味です。ですからキリストが御自分の義で我々をおおわれるのは罪を隠すのではなく、罪を取り除くという事であるのがわかります。それで罪の許しとは単なる形式や、単に天の記録に罪の取り消し書き込まれる事ではなく、…実際にとがが除かれるという事であり、それが起こるなら彼は義とせられ、義に造り変えられ、確かに一大変化を経験するのです。…価なしで与えられる罪の完全な許しは、新生として知られる奇跡的な変化をもたらし、新たな清い心を与えるのです。もう一度尋ねますが義認、罪の許しは何によってもたらされますか？信仰です。…この同じ信仰を働かせる事が人を神の子に造り変えるのです」(EJW CHR p51-67)。

「義認というのは義と宣言される事で、…信仰によって義とせられるというのは神の言葉によって義とせられる事です。神の言葉が発せられると、何でも言われた通りになってしまいます。…イエス・キリストによって語られる神の言葉は、それが語られる以前には世に存在しなかった物を存在させてしまうの

です。人間の内には義なるものはありません。…しかし神は人間の上に義を宣言させる為にキリストをお立てになりました。キリストが言葉を語られたので、それを受け入れる者にはただそれだけで、何もなかった彼の内に義が現れるのです。…信仰によって受け入れられた神の言葉は以前は何もなかった人間の内に、その生活において義を造り出します」(ATJ RH 1899 1/17)。

3. 義認は何もしなくても今すぐ与えられる、それはいつでも与えられる。

「人間は信仰によって、つまり神の言葉に頼る事によって義と造り変えられるだけでなく、造り変えられたのと同じ方法で生き続けるのであり、…同じ経験を重ねるのです」(ATJ RH 1899 3/7)。

「神の御言葉、義の言葉、生命の言葉が“今”、“この場で”与えられています。あなたは今、義に造り変えられる事を望みますか？今、その御言葉によって生きようとなさいますか？これこそ信仰による義認です。…世界で最も単純な事です」(ATJ RH 1896 11/10)。

「神は信じる者の上に義を宣言されます。宣言するというのは言葉を出す事です。…そして『あなたは義人だ』と言われた瞬間、それを信じる罪人は罪人でなくなり、神の義となるのです。義を宣言する神の言葉自体が義であり、罪人が信仰によってその御言葉を自分の心に受け入れるや否や、その瞬間から彼は心の内に神の義を持ち、心

の状態は生活に現れますから、新しい神の律法に従う人生が始まるのです」(EJW GC p26-28)。

4. キリストを心に受け入れる事によってキリストが心を服従させて下さる。

「この用語(義認)は義とするという意味です。さて、ローマ2:13は我々にどうという人が義とされた者かを教えています。『律法を聞く者が神の前に義なる者ではなく、律法を行なう者が義とされる。』義人とは律法を行なう者です。ですから…人を義とし、義人に造り変えるというのは、人を律法を行なう者にする、という意味なのです。信仰によって義とされるというのは、信仰によって律法を守る者に造り変えられる事です。神は不信心な者を義とされます。…それは人間の落度を隠して実際には大変な悪人である人を義人の仲間に加えてしまう、というのではなく、その人を律法を守る者に造り変えるというのです。不信心な者を神が義人だと宣言される時、その瞬間からその人は律法を守れるのです。…栄化を別にすれば、神が人間の為にお出来になる全ての事を、義認は可能にします。…義を保ち続け、律法を守り続けるには信仰と神への屈服を続けなければなりません。こうして次の聖句の意味がはっきりします。『すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。』(ローマ3:31)つまり、律法を破る事によって律法が無効になったかのように

生活するのではなく、信仰によって我々の心の内に律法を確立するのです。信仰はキリストを心の内に住まわせませんが、キリスト御自身…には律法が宿っているので、こうして律法が心に確立されるわけです。『ひとりの人の不服従によって多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの服従によって多くの人が義人とされるのである。』このひとりの服従とは主イエス・キリストを指し、彼の服従が信じる全ての者の心にもあらわされるのです」(EJW ST 1893 5/1)。

II. キリストの人性

「ヘブル3:1にはクリスチャンがしなければならぬ全ての事を一言で言い表した勧告があります。『そこで天の召しにあずかっている聖なる兄弟たちよ、あなたがたは私たちが告白する信仰の使者、また大祭司なるイエスを思いみるべきである。』これを聖書の命令通り実行すれば、つまりキリストがどんな御方であるかの真の姿をいつも理知的に思いみるなら、その人は完全なクリスチャンに造り変えられます。何故なら『眺める事によって我々は変えられる』からです」(EJW CHR p5)。

この文章には三つのポイントがある。

①真のイエスを見るーキリストはどのような性質をとられたのか、どのように勝利されたのかを見る。

②キリストの大祭司としての働きを思う一何の為に聖所を清めているのか何故まだ清まらないのかを思う。

③キリストを眺める事により完全になるーキリストに表わされた福音を理解し、受け入れる事によって回復される。

1. キリストは墮落した性質をとられた。

「キリストを身近な御方としてできるだけ感じさせないようにするのが、人類に対するサタンのお昔からの作戦でした。たとえクリスチャンであっても、彼らのキリストに対する親近感が少ないければ少ないだけ、サタンは満足するのです。それからサタンは我々が生まれつき持っている神への敵意を利用して、行いによって救われようとする制度を…つくりあげるので」(ATJ GCB 1895, p478)。

「私のところに質問が二つ寄せられていますので、この場で読んでみたいと思います。一つはこうです。『処女マリヤから生まれた聖なる者は罪によって墮落した肉体を取られたのでしょうか。そしてその肉体は我々の肉体がそうであるように、罪への傾向があったのでしょうか。』さて私はこれについて聖書に書いてあることしか知りません。しかし聖書は単純で明らかなので、私に永遠の希望を与えてくれるのです(会衆:アーメン!)。私も失望落胆と疑いの日

々を経験しましたが、それはもはや過ぎ去った事を感じます。私も他の人々と同じように一生懸命主に仕えようと試みましたが、失意の内にその努力を中断し、『無理だ、私には出来ない』と独白せざるを得ませんでした。それは私自身の弱さを思い知らされたからで、私の眼に正しく見える人々や、聖書に出てくるかつての聖人たちは、私とは違っていたから正しい事ができたのだとしか思えませんでした。私は多くの残念な経験を通して、自分には悪を行なう事しかできないのを知りました…。ここで一つ質問したいと思いますが、もしイエス・キリストの…この地上での生活が単なる演技にすぎなかったとしたら、どこに望みがあるでしょう。…彼は『罪は犯されなかったが、我々と同じように試みられた』とあります。一晩中祈られたとも書いてあります。あまりの苦悩に血のような汗がその顔からしたり落ちたともあります。しかし、もしこれらが見せ掛けで演技だったとすれば、一もしそれらの戦いが本物ではなく、彼は誘惑を何も感じておらず、単に祈る真似をしていただけなら、これらは私にとって何の益があるのでしょうか…。しかし…決して私が耐えることの出来ない経験を耐え、一生かかっても私自身の力では勝利できない事に勝利された御方がおられる。…私個人のどんな誘惑よりも激しい誘惑を経験され、あらゆる点において私と同じでありながら、かえって私より困難な境遇におかれ、肉体を通してサタンがしかけるすべての攻撃にさらされ、なおかつ罪を犯されなかった御方がおられる

からこそ、私は心から喜ぶことができるのです(会衆:アーメン!)」(EJW GCB 1901, P403,404)。

ワゴナーの主張は次の三つである。

①キリストは我々のように試みられた。彼の祈りは必要に迫られてのものだった。彼は我々とあらゆる点において同じになられたが、罪を犯されなかった。彼は肉体を通してサタンがしかける全ての攻撃を感じられた。

②それでもキリストは“罪を知らない”御方で、墮落した肉体において完全な義を表わされた。

③キリストを信じる者は彼らをも罪を犯す事から救い出される力を体験する。

2. キリストが墮落していない性質をとられた、というのはカトリックの教えである。

「キリストは…墮落した肉体をとられたのでしょうか。皆さんはローマ・カトリックの無原罪懐胎という教理をお聞きになった事がおありでしょうか。それが何かを御存知ですか。…それをイエス・キリストが罪なくして生まれた事だと思っている人もいますようですが、そうではありません。無原罪懐胎というのは、イエスの母マリヤが罪なくして生まれたという教えなのです。何故そうする必要があるのでしょう。うわべはキリ

ストを高めるように見えるこの説は、実は…イエスと…人類の間に越えられない淵をもうけようとする悪魔の仕業です」(同 p404)。

「我々は各々、ローマ教会を脱しているかどうかを知る必要があります。…イエスの肉体が清いもので我々と同じではなかった(我々の肉体は墮落しているから)という教えは、必然的に処女マリヤの無原罪懐胎説に導く事に気がつきませんか。…イエスが我々とは全く異なり、その肉が何の葛藤もない、墮落していない肉体だったとするならどうしてもローマ・カトリックの無原罪懐胎という教理が必要になるのです。しかしそこでとどまる事ができるのでしょうか。マリヤが罪なくして生まれたからには、その母親も罪のない肉体を持っていたに違いありません。しかしそこで終わるわけにもいかないのです。そのまた母親も同じ事で…そしてついにはアダムまでさかのぼってしまいます。結果は?人類は墮落しなかった、アダムは罪を犯さなかった、という事になってしまい、ここにローマ・カトリックと心霊術の教えの特徴が浮かび上がってくるわけです…。(キリストは)肉体において試みられました。主は肉において苦しまれました。しかしその思いは一度も罪に屈する事がなかったのです。主は肉において神の御旨を完成し、どんな人間でもどんなに墮落した肉体を持っていても、神の御旨を成し遂げる事ができることを証明されました。…みなさんの体、私の体、全ての肉体はキリストによって神の御旨がなされるように

神がつくられたのです」(同p404,405)。

3. キリストの模範は特に 144,000 人のためである。

「神は御自分の力が、どんなに罪深い者でも救いだし、墮落した肉体において完全な生涯をおくらせる事ができる事を世に示されます。その後はじめて神は人間の弱さを取り除き、人間の住む環境を作り変えてくださるのです。しかしまずこの奇跡が墮落した人類のうちに表わされねばなりません。それも単にイエス・キリストという一人の御方だけでなく、彼に従う何千という人々の内に表わされるのです。時折見られる幾人かのケースというのではなく、キリストの完全…が教会全体を通して世に示されるのであり、これが人類に生か死かの選択をせまる最後の働きとなるのです。…主は罪の内に生まれた子供を、或いは姦淫によって生まれた者でさえ、神の民の王子の列に加える事がお出来になります。主は御自分の系図を隠されない事によって、それを明らかにされました。…我々は罪の傾向(体質的傾向:tendency)を受け継ぎ、罪の性質を持って生まれたことを嘆き、それに勝利できない事を思って失望しかけていました。…しかしイエス・キリストは「肉によればダビデの子孫」であり…罪深い者たちを兄弟と呼ぶ事を恥とされません。ですから我々の受け継いだ性質がどのようなものであれ、聖霊の力は肉体の力にはるかに勝っているので、それまでの肉の支配を完全にくつがえし、我々を神の性質

にあずかる者として下さいます。福音には何とすばらしい可能性が秘められているでしょう」(同p406-408)。

4. 総理を初めとする当時の世界総会はこのを受け入れなかった。

「これらの聖句(ローマ8:3;ヘブル2:9;ピリピ2:5-7)はキリストが御自分の上に人間の性質をとられた事、その結果、死ぬべき存在となられた事を示しています。主がこの世に来られた目的は死ぬ事だったのです。…私はキリストが罪人だったと言っているのではありません。(ヘブル2:16,17引用)…キリストの先祖についての記録を読み、彼らとて我々と同じ弱さや欲望を持っていたのを知るなら、どんな人間も自分の罪に関して遺伝のせいにする事はできないのが明らかです。もしキリストがあらゆる点においてその兄弟と同じになられたのでなければ、彼の罪なき生涯は我々にとって何の慰めにもなりません。我々はそれに驚嘆し、感心するかもしれませんが、同時に自分に全く失望する事でしょう。…あなたは『主が十字架上で大いなる犠牲として世の罪を自ら負われた事に我々(世界総会とR&Hの指導者)は同意するが、主は罪の呪いのもとに生まれたのではない。主が律法の呪いのもとに生まれた、などというのは異端神学もはなはだしい。』と言われました。(バトラー著、「ガラテヤ書の律法」p58引用)神学的に異端であろうと、聖書が確かにそう言っているのです。…あなたは主が生涯中に一度も罪を犯さなかったから、律

法の呪いのもとに生まれた筈がないとお考えのようですが、しかし同時に十字架上では主は律法の呪いのもとにあったと同意なされる。それでは主は十字架上で罪を犯されたのですか？そんな筈はありません。では主が御生涯のある時点で罪を犯す事なしに律法の呪いのもとにあったとすれば、それ以外の時にも律法の呪いのもとにありながら罪を犯さずにいたというのは可能ではないでしょうか？どのようにして神が肉体に、しかも罪深い堕落した肉体に宿る事が出来たのか私には理解できません。…ただそうする事なしに主は人類の救い主とはなれなかったという聖書の言葉を受け入れるまでの事です」(EJW GG p80-82 総理バトラーへの公開状)。

「キリストが死を味わう為に人間のようになられたのだとすれば、それは堕落した人間のようになられたのだという事は、少し考えれば誰にでもわかる事です。何故なら死を起こすものは、罪以外の何ものでもないからです。主が我々のとがを全て負われなかったなら、死の力がキリストに及ぶことは、なかったでしょう。しかもキリストのとられた肉体は罪なき者ではなく、罪深い者の肉体であり、その内には堕落した人類に共通した全ての弱さ、罪深い性向(本質的傾向:tendency)があったという事は…聖句に明らかです。確かに主の母親は純潔で信仰深い女性であったに違いありませんが、人類が肉体的にも道徳的にもこれ程堕落する以前に主が生まれていたら、体験さ

れなかったであろう肉体の弱さをキリストは体験されたのでした。…イエスは一晩中父に祈られました。もって生まれた肉の弱さを通して敵に苦しめられるという事を主が知らなかったとすれば、何の為にそんな事をされたのでしょうか。主が『さまざまの苦しみによって従順を学び』とあるのは、敵が不従順であった事もある、というのではなく、…彼が肉において経験したさまざまな苦しみによって、人間が服従しようとする時どんな戦いを通らねばならないかを学ばれたのです。…ある方々はここまでこの記事を読みながら、我々がイエスの品性を罪人と同じレベルに引き下げている、ととられるかもしれませんが。そうではなく、御自分が最も厳しい逆境にあって保たれたそのしみの無い純潔に我々を引き上げる為、自ら罪人のレベルまで下って来られた救い主の力を、我々は強調しているのです。…彼の生涯中、戦いは続きました。肉体は敵の及ぼす力によって罪を犯しそうになりますが、主の天来の性質は罪の欲求を一瞬たりとももて遊ぶことなく、その天来の力は一瞬たりとも妥協されなかったのです」(EJW ST 1889 1/21)。

5. ホワイト夫人は EJW (ワゴナー)、ATJ (ジョーンズ) の主張を支持した。

「キリストは人間と同じ性質を持っていた筈がない、もしそうしていたなら主は同じ誘惑のもとに罪を犯していた筈だ、という手紙が次々と私のところに届いています。もし主が人間の性質をとられなかったなら、主は我々の模範で

はありえません。もし主が我々の性質にあずかれなかったなら、人間と同じように試みられる事はなかったでしょうし、誘惑に屈する可能性がなかったなら主は我々の助け主となることはできなかつたのです。キリストが人間の為自ら人間として戦いを戦われたというのは、厳粛な事実です。主の試みと勝利は人類がその模範に従うべき事、人類が神性にあずかるようになる事を教えています。…人間は悪をしりぞける力を持つ事ができます。この世も、死も、地獄も負かす事のできない力、キリストが勝利したように彼らを勝利させる力を持つ事ができるのです」(朝礼拝バトルクリーク 1890 1/29, Cf 1SM p408,409)。

「多くの人『イエスは我々と同じでなかった…だから我々は彼のように勝利する事はできない』と言う。しかしこれは事実ではない。…キリストは罪人の試練を御存知である。その誘惑も御存知である。彼は御自分の上に我々の性質をとられた」(「我々と同じように試みられたキリスト」1894年2月出版ホワイト夫人によるパンフレット p3-4)。

「クリスチャンにとって最大の誘惑は内から湧きおこるものである。彼は生まれつきの心の傾向と戦わねばならないのである。主は我々の弱さを御存知である。…罪に対する苦闘の一つ一つは…キリストの人間の心に対する働きかけである」(同 p11)。

「アダムがエデンで罪を知らなかつ

た時でさえ、神の御子が人の性質をおとりになることは無限の屈辱に近かつた。ところがイエスは人類が四千年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をお取りになったのである。アダムの子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。…主は我々の苦悩と試みにあずかり、罪のない生活の模範を我々に示すためにこのような遺伝をもっておいでになったのである」(各時代の希望 上 p35,1898)。

「自分自身の力では我々の墮落した性質のやかましい要求を拒む事ができない。この道からサタンは試みをもってやってくる。キリストは彼が遺伝的な弱点に乘じ…る事を御存知であった。…イエスの中にはサタンの詭弁に応ずるものは何もなかった。イエスは罪に同意されなかった。一つの思いにおいてさえ彼は試みに負けたまわなかった。我々もそうなるのである。キリストの人性は神性と結合していた。イエスは聖霊の内住によって戦いに備えられた」(同 p134-135)。

「人間が誤った行動をとるように強く影響される時、それをする事が可能であるのを知りながらも神の力にしっかりとつかまりながら、信仰によってそうする事を拒む時、誘惑はしりぞける事ができる。これがキリストの経てこられた経験である」(ユース・インストラクター誌 1899 7/20)。

「この戦いにおいてキリストの人性

は、他の誰も経験することのない程試みられた。…これらは本物の誘惑であって、見せかけなどではなかった。…食欲、神の導きを求めない勝手な行動、この世の神を拝む事、永遠の福音をこの世の快樂の為に犠牲にする事、…神の御子はその人性において人類を悩ます激しい圧倒的な試みと闘われた」(手紙 116, 1898 cf 1SM p94-95)。

6. 弱く罪深い性質をとられたキリストを支えた力は、我々にも同じ助けを保証する。

「全ての点において我々と同じになられた主は、試みられた時、我々が試みられる時に感じるものを感じられました。…その肉体において彼は我々と同じように弱かったのであり、御自分では『何も出来なかった』のです。ですから、主が『我々の病を負い、我々の悲しみをにない』我々と同じように感じられた時、信仰によって与えられた神の力によってそれらすべてに勝利されたのであり、その力を我々の肉体にももたらされたのです。ですから主の名はインマヌエル『神、我らと共にいます』というのです。神がキリストとおられるというだけでなく、神が我らと共におられるのです」(ATJ CCP p26)。

「御自分が救う為に来られた者たちと同じ肉をとるのでなければ、わざわざ肉をとる必要などないのです。…この世に存在する唯一の肉は全人類に共通した哀れな、罪深い、失われた人間の肉ですから、主が宿られたのが

この肉でなかったとすれば、彼は救いを必要としているこの世界に実際には下ってこなかった事になってしまいます。…この世にある人間の性質を主が取られなかったとすれば、人類を…助ける事に関して主は、地上に来られなかったのと同じくらい遠い存在のままだからです」(同 p35)。

「キリスト及びマリヤの人性、そして我々の性質に関するローマ(法王教)の信仰は、…我々に内住されるには神はあまりにも聖すぎる、そしてあまりに罪深い我々はあるがままの姿で神の御前に来る事はできない、という考えからきているのです。ローマ(法王教)の信仰は、神が我々の内に住まわれる為には、まず我々が清まって聖なる者にならねばならないというのであり、イエスを信じる信仰というのは我々が清く、聖なる者となるには、まず神が我々の内に住みたまわねばならない、というのです」(同 p39)。

「誰にでも、先祖から受け継いだ様々な罪の傾向というものがあつた、たとえまだ罪の行為として現われていなかったとしても、機会さえあればいつでもその罪を犯す用意があるのです。この生まれつきの罪を犯す傾向と戦い、それを征服しなければなりません。…我々の罪を犯す傾向(liability: 罪への抵抗力の欠如)は、主が肉体をとられた時その上に負わされました。…こうして『神子を罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられた』とあるように、主は御自分がとられた肉に

において罪と闘い、勝利をおさめられたのです」(同 p40,41)。

「ですから遺伝と自らの選びとの二つの方法によって主は“世の罪”を負われたのです。このように著しく不利な立場にありながら、何の障害もなかったアダムとエバが敗北した戦いを主は勝ちぬかれたのです。そしてこの肉において罪を罰する事により、御自分の肉において敵を打ち破る事により、主は御自分を受け入れる者を遺伝の法則より救い出し、御自分の神性と遺伝の法則に打ち勝つ力を与えられるのです」(同 p43)。

7. イエスは我々と同じように誘惑されたが、思いにおいてさえ罪に妥協されなかった。

「証の書には、キリストは我々の持っているのと同じ欲望を持っておられなかったという文章があります。ある人は既に見つけたかもしれませんが、捜せば誰でも見つける事ができます(2T p509等)。さて、著者が言わんとしている事以上を皆さんが読み込んだり、言いもしなかった事を思い込まなければ、この研究には始めから終わりまで、何の矛盾もありません」(ATJ GCB 1895, p312)。

「キリストが我々と同じ欲情 (passion: 激情とも訳せる) を持っていなかったという事についてですが、聖書のどこを見ても、主は我々と同じ…肉の様をとられたとあります。…それ以上いっては

いけないのです。彼は罪の肉の様をとられたのであり、罪の思いまで同じだったと言っていない。…彼の肉体は我々のものでしたが、その思いは『イエスの思い』でした」(同 p327)。

※これは注意を要する点である。キリストと我々は性質は同じだが、彼は一度も罪を犯さず我々は犯したので、我々の場合は体得によって罪の性癖を身につけてしまった。これは犯した罪の回数や程度により、その欲情の強弱に差はあるだろうが、全ての人類が持っているものである。

「キリストの人性をどう解釈するか特に気をつけなさい。罪への傾向 (propensity: 性癖) をもった人間として彼を人々に示してはならない。…キリストに汚れの一つのしみ、又は傾向 (inclination: 好み) が少しでもあったとか、或いは汚れに染まられたとかいう印象を少しでも与えてはならない。…彼は多くの試練に会われたが、ただの一度もそれに応じなかった。ただの一度たりともサタン領域に踏み入る事によってサタンを有利になさらなかった」(手紙 8,1895)。

※これはホワイト夫人がオーストラリアのタスマニア島で働いていた SDA 牧師 W.L.H. ベーカーにあてた手紙である。この牧師は Adaptationism (キリストは普通の人間だったが、神の子として受け入れられたという教理) に近い事を教えていたらしく、ホワイト夫人は彼にキリストは一度も罪を犯され

ず、当然一つのしみも汚れも傾向も受けられなかったので、普通の人間と同様に扱ってはいけない、と注意した。しかしホワイト夫人がジョーンズとワゴナーに、キリストの人性に関してこのような注意を与えた記録はない。しかもこのベーカーへの手紙をホワイト夫人は出版されなかったので、1956年に「教理の研究」が書かれるまで一般に公開された事はなかった（注：「教理の研究」は1888年の主張とは逆の立場をとっている為、この手紙を引用したものと思われる）。ともかくワゴナーとジョーンズの主張は、次のホワイト夫人の言葉と完全に一致する。

「彼は人間の性質をとって人類の頭になられる筈であったが、人間の罪深さは取られなかった」（サインズ 1901 5/29）。

「キリストは墮落した状態における人性を取られたが、その罪には全く関与されなかった」（サインズ 1898 6/9）。

「キリストの人性は彼らと同じものであったが、更に苦しみに敏感であられた。何故なら彼の霊性はあらゆる罪の汚れから自由であったからである。…彼は従順で神と一つであられた。彼の上には腐敗のしみは何一つなかった」（サインズ1897 12/9）。

「彼は…罪は別にして我らの一人のようになられて、彼の生涯と品性が全ての者の模範となり、彼らが永遠の生命の尊い賜物を得る事ができるようにさ

れた」（ユース・インストラクター 1886 10/20）。

キリストは肉体的にも知的にも道徳的にも墮落した性質をとられたと、各時代の希望は証言している（上巻 p124）。肉体的、知的に我々と同じレベルであったというのはわかりやすい。ここまでは意見の相違もないだろう。問題はキリストがどのように道徳的に我々と同じレベルであったか、である。ホワイト夫人はこの点においてキリストが墮落以前のアダムとは異なっていたことを明らかにしている。

「我々の最初の両親の罪は、神に対する人間の意志の本能的服従という金の鎖を断ってしまった」（MS 1,1892）。

「…人間は神に似せて造られたのである。彼の性質は神の御旨と調和していた。人間の知力は神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった」（人類のあけぼの上 p20）。

①罪を犯す以前のアダムは本能的に服従できた。キリストは我々と同じように聖霊の内住によってのみ服従できた。

②アダムの性質は神のみ旨と調和していたので、自己否定する必要がなかった。キリストの性質は我々と同じように神のみ旨と調和していなかったため、自己否定する必要があった。（注：自己否定したからこそ、キリストの選択は

いつも神のみ旨と調和していた。これが品性である)。

③アダムは理性で食欲や情欲を支配することができた。キリストは我々と同じように理性だけでそれらをコントロールする事はできず、神の助けを常に受けなければならなかった(注: ホワイト夫人も否定しているようにキリストはゆがめられた食欲や、低級な情欲を持っていなかったが、神の力によって支えられなかったらすぐにでもそれらの傾向〔propensity: 性癖〕を持つに至ったのである)。

ワゴナーの結論はこうである。

「ある人はこう言うかもしれません。『これは私にとって何の慰めにもならない。正直に言って私には模範が与えられていても、それに従えない。何故なら私はキリストが持っていた力を持っていないのだから。主は地上においても神であられたが、私は人間に過ぎない。』しかしあなたが求めさえすれば彼の持つておられた力にあずかる事ができるのです。『彼自身弱さを身に負うて』おられたにもかかわらず『罪は犯されなかった』のです。ですから疲れた、弱い、罪に苦しむ魂は希望を持ちましょう。助けを必要としている時にそれが必ず与えられる『恵みの御座に』『はばかり事なく』近づきましょう。主は『私たちの弱さを思いやる事ができる』のですから」(EJW CHR p29)。

III. 完全

1. 我々に与えられている完全とは、罪を犯し続ける事からの救いである。

「小さい角…が天の上なる祭司制…のかわりに地上の人間による墮落した祭司制、とりなし、聖所をうちたてた事を我々は見てきました。この…祭司制によって罪人は祭司に自分の罪を告白した後、更に罪を犯し続けます。その祭司制には…それ以上の力はないのです。しかし残念な事に不法の秘密の力に属していない者、イエスとその祭司制を心から信じる者さえ、告白した後罪を犯し続けているというのが現実ではないでしょうか。

これは我々の偉大な大祭司とその払われた犠牲、とりなしに対する侮辱ではありませんか。このようにして我々が主とその犠牲ととりなしを『荒す憎むべきもの』と同位置に置き、主とそのとりなしには『不法の秘密の力』以上の力はないと言い表す事は大それた事ではないでしょうか」(ATJ CCP pl21,122)。

「全ての信じる者がこの世にあって生きている限り、清く罪と汚れのない…生活をおくる事のできる道を開き、それを私たちのために聖別されたのです」(同 p83,84)。

※ホワイト夫人も全く同意見である。「あがなわれることは、罪を犯さなくなる事である (RH 1900 9/25)。

2. その完全はこの不完全な肉体にお

いて到達できる。

「品性の完成—この世にあって、人間の肉体において得られる完全—がクリスチャンのゴールである。キリストはこの世にあって、人間の肉体においてそれを完成されました。それによって全ての信じる者が彼にあってそれを完成する事のできる道を開かれたのです…」(ATJ CCP p84)。

「さて、取り違えていただきたくないのですが、私も皆さんも主に頼らないで生きる事ができる程、清くなるなどと考えてはいけません。この肉体が変化することを期待してはいけません。もしそうするなら重大な危険に陥り、恐ろしい罪を犯すでしょう…。この滅ぶべき体は主が来られる時に朽ちないものに変えられます。…誰でも自分の体は清められたと思ひ込み、全ての衝動は神からのものであると考えるなら、それは自分の罪深い肉の欲求と聖霊とを取り違えているのです。その人は神と自己とを置き換え、自分自身を神の位置に置いているのであり、これこそ法王教の精神なのです」(EJW GCB 1901, p146)。

3. 完全とは誘惑を感じなくなる事ではなく、それに応じなくなるのである。

「クリスチャンには何とすばらしい特権が与えられているのでしょうか。…どんなにサタンが攻撃しようとも、肉の一番弱い所を攻めようとも、彼は全能者の陰に宿り、神の力に満たされる事が

できます。サタンより強い御方がその心に絶えず住まわれる」(EJW ST 1889 1/21)。

「ある者たちは他よりもずっと整えられた気質を持っています。自分の好ましくない性格の為にいつも悩まされ、苦しめられ、問題にぶつかったり…内なる敵と闘っている人々がいる一方ではその半分もしなくてすむ人たちもいる」(2T p74)。

ホワイト夫人はこの違いは子供の頃の家庭での訓練がもたらすと指摘し、良いしつけのおかげで苦しまないで済んだ人々は、これらの不幸な人々を裁いてはならないと注意している。しかし同じ教育を受けても気質が異なる場合がある。

「ある子供たちには道徳的な力が強く支配しており、彼らは自分たちの思いと行動をコントロールする意志の力を持っています。他の子供たちにはほとんどおさえがたい程の、動物的な激情があります。同じ家庭でもしばしば見られるこれらの違った気性に対処する為、母親と同じように父親も天の助け主から助けと忍耐をいただかねばなりません」(サインズ 1887 12/20)。

「天使たちは一番必要とされている所にいつもいて、自我と最も激しい争いをしている人や、最も失望的な環境にある人の側でいつも働いている。多くのよくない性格をもった弱い臆病な人々にも天使たちの特別な保護がある。利己的な人がはずかしい仕事と思うよ

うな事、すなわちあらゆる方面に劣った素質をもつ不幸な人々に仕えることが…天使たちの働きである」(ミニストリー・オブ・ヒーリング 1905 p76)。

※性癖、性向、気質は勝利することによって清められていく。

「新しい改心者は長年の習慣や、特別な誘惑との激しい戦いをしばしば経験するであろう。そして支配的な激情や性質に負けて…あやまちや罪の行為を犯す事があるかもしれない」(5T p604,605)。

「天よりの恵みの影響下にあつて、品性の悪い特徴は確実に弱まっていく一方、全ての良い性質は力強くなっていく」(サインズ 1882 9/27)。

「神と神がつかわされたイエス・キリストを体験によって知ることは…人を自己を治める者にする。低い性質の衝動と欲望とは高度の意志の力に支配されるようになる」(実物教訓 p73,1901)。

「真理のパン種も誰にも気づかれないうちに、徐々に魂を変えていくのである。生れながらの傾向 (inclination:好み) がなごやかに静められる」(同 p73)。

「我々は一つだに罪の傾向 (propensity:性癖) を持ち続ける必要はない。…我々が神性にあずかるにつれ、先天的、後天的な罪への性向 (tendency) は品性から切り離される」

(RH 1900 4/24)。

4. 罪とは誘惑に応じる事である。

「誰も罪を犯すように強制されることはない。彼自身の同意がまず必要であつて、欲望が理性を支配し、不義が良心を征服する前に、その魂が、罪の行為を意図しなければならない。どんなに強くとも、誘惑は罪の言い訳にはならない」(5T p177)。

「イエスは罪に同意されなかった。ひとつの思いにおいてさえ彼は試みに負けたまわなかった。我々もそうなるのである」(各時代の希望 上 p135)。

「あなたがむなししい想像にふけりあなたの頭脳に不純な事柄を考えめぐらすのを許すなら、ある程度神の前にあなたはその想像を実際に行動に移したのと同じく罪がある。行動を阻んでいるのはその機会がないというだけの事である」(2T p561)。

「不純な思いが心に秘められるなら、それだけで罪となり、何も言葉や行動として表わさなくてもよい。…あなたを誘惑するのはサタンの仕業だが、それに属するのはあなた自身の行動である。誘惑されている者を犯行に至らせる為に強制する力は、サタンの全勢力をもってしてもありえない。罪の言い訳はない」(4T p623)。

「好ましくない言葉の罪は悪い思いを心に秘める時に始まる…不純な思い

をそのままにし、聖くない欲望を心に秘めるなら、魂は汚され、その忠誠さは妥協させられる。…我々が罪を犯さない事を望むなら、その最初の兆しを避けなければならない。どんな聖くない思いも、瞬時に追い払わねばならない」(5T p176-177)。

5. キリストの最後の贖いは我々の総ての罪を示す事によって完全な勝利を可能にする。

「主は我々の承諾なしに我々の罪を取り去る事はなさいません。私はいつでも主を選ぶか、自分の罪を持ち続けるかの選択をしなければなりません。…これから後神が罪だと示されたら、それが何であろうと捨てる事をためらうべきでしょうか。…主にこう言いましょう。『主よ、私は今選びます。私はこの罪とあなたとを引き換えます。わたしはあなたを選びます…。』一体どこの誰が自分の罪を示されて失望する必要があるのでしょうか。

さて兄弟がたの何人かはこの選びをさっそくなさっているかもしれません。ここに来た時は何も感じていなかった、今まで気づかなかった何かを聖霊が彼らに示されました。…するとそのように示された事を感謝して、罪を捨てるかわりに…彼らは失望するのです。『一体どうしよう。私の罪はこんなに多いのか』と…。

もし以前には考えてもみなかった罪を示されたとすれば、それは主がこころ

の深みを清めようとしておられる、というまでの事で、いつかそれはついに心の底にまで達するのです。そして御自分の御旨にそわない、不純で汚れたものの最後の一つを取りだして我々に示される時、我々が『そんなものよりキリストを持った方が良い』と言うならば働きは終了し、生ける神の印がその人の品性のうえに押されるのです(会衆:アーメン!)

完全にイエス・キリストによって満たされているのと…いくつかの罪を知らされずに保ち続ける事と、どちらを望まれますか?もし我々が罪を持ち続けるなら、どうして神の完全な品性である神の印が我々に押されましようか。それで我々が夢にも思わなかったような深い所まで主は掘り下げられるのです。我々自身は自分の心さえ知らないのですから、…主にその働きを続けていただきましよう。…もし主が我々に知らせる事もしないで我々の罪を取り去るとしたら、それには何の意味があるでしょうか。我々は機械にすぎなくなってしまいます。…我々は理知的な、神の器なのです。…理性を備えた道具なのです。我々は自分の選びによって神のご用に用いられるのです」(ATJ GCB 1893, p404,405)。

ホワイト夫人もこの主張を支持する。

「あなたの置かれた状態が、あなたの品性の新たな欠陥をあなたに示す役割を果たしました。しかし示されたものは、もともとあなたの内にあったものに

他なりません」(RH 1889 8/6)。

「主の日には…心のすべての部屋をさがして隠れた全ての自己欺瞞を見つけてだされる」(彼を知る為に p290)。

「知られなかった品性の傾向は…明るみにだされねばならない」(7T p210,211)。「神は…彼らの隠された欠点を示される」(4T p85)。

「大いなる贖罪の日を閉じるにあたり…残りの教会は…自分たちの罪深さに完全に気づいている」(5T p472,473)。

※告白は罪人の為である。それを告白して義と取りかえる事によって勝利し、品性を完成させるのが目的である。だから神が我々にのぞんでおられる告白は、今までの罪を全部思いだして、いつどんな罪を犯したかのリストをひとつずつ告白して謝罪することではない。罪の行為を引き起こさせる「品性の傾向」が直されねばならない。その為に神は品性の落度が現れるような状況に我々を置かれるのであって、罪が示されるのは有り難い事なのだ。

6. この完全は恩恵期間終了前に到達されねばならない。

「主は…墮落した肉体においても罪を犯さずに生きる事ができるのを証明されました。七つの災いが下る時には全ての者がそれを認めるように、主の完全な生涯が朽ちるべき肉体に表

わされているのです。…もしこの力が恩恵期間の終了以前に表わされないなら、それは人類に対して何の証にもなりません。…ですから思恵期間の終了以前に、罪の肉を持ち続けているにもかかわらず主にあって完全となり、罪を犯さなくなった人々のグループが現れるのです。…これ以上の神の力の証明はありません」(EJW GCB 1901, p146,147)。

「これはすべてこの思恵期間中になされねばならない。この働きが我々の内に完成されるのは、今である」(2T p355)。

「心の内にあるものがことごとく示される時が近い。すべての者は鏡に写して見るように、隠れた動機が結ぶ実を見せられる。…我々の思恵期間は閉じつつある」(RH 1896 11/10)。

「今我々の大祭司が我々の為に贖いをしておられる間に、我々はキリストにあって完全になる事を求めなければならない。救い主はその思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは人々の心の中になんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。…しかしキリストは御自身について『この世の君が来る…。だが彼はわたしに対してなんの力もない』と宣言された。サタンは神の子の中に彼に勝利を得させるなんのすきも見つかる事ができなかった。神の御子は天父の戒めを守られた。そしてサタンが自

分に有利に活用できる罪が彼の中にはなかった。これが悩みの時を耐えぬく人々の内になければならない状態なのである」(各時代の争闘下 p397)。

7. 1888年の信仰による義＝第三天使の使命である。

「(信仰による義)を自分で理解している者は100人中1人もいない」(RH 1889 9/3)。

「信仰による義認とは何か、それは人が己のために自分の力では出来ないことを人の代わりに行なうことによつて、人間の誇りを地に落とす神の働きである」(シリーズA No.9, 1897)。

「何人かが私に手紙を送って信仰による義のメッセージが第三天使の使命かどうかを尋ねていますが、私は『それこそ真に第三天使の使命である』と答えました」(RH 1890 4/1)。

「それを信じると主張する者の中にさえ第三天使の使命を理解している者は少ない」(原稿 15,1888)。

「第三天使の使命を説いている牧師の全部がそのメッセージが何であるのか理解している訳ではない」(5T p715,1889)。

「我々は第一、第二天使の使命について口にすし、第三天使の使命についてもある程度知っているものと思つているが、限られた知識で満足している

ならば、我々は真理の更に深い理解を得るには失格である」(GW p251,1892)。

「第三天使の使命は滅びつつある世に対する唯一の救いの望みとして示されなければならない」(手紙 87,1896)。

8. 1888年の信仰による義が体験される時、大いなる叫びが始まる。

「我々はそれに参加する事もしない事もできます。…すべての民族、国家を代表する白人、黒人、黄色人種、インディアン、大多数は貧しい者だが、何人かの金持ちもおり、わずかの上層階級の人々と多くの取るに足りない群集からなる集団ができあがるのです。世界中のありとあらゆる性格、人種、国柄を代表する人々が同時に同じメッセージを語り、主イエス・キリストの品性をあらわすのです。…それが起こらねばならない事を我々が知り、信じるならそれは実現するのです」(EJW GCB 1901 p149)。

「神は御自分の力が…完全な生涯をおくらせる事が出来るのを世に示されます。…それも単にイエス・キリストという一人の御方だけでなく、彼に従う何千という人々の内にあらわされるのです。…キリストの完全…が教会全体を通して世に示されるのであり、これが人類に生か死かの選択をせまる最後の働きとなるのです」(EJW 同 p406)。

「世界は神に関する誤った解釈の暗黒に覆われている。人々は神の品性の

知識を見失い、それを誤解し、誤って理解している。この時にあたって、神からの使命、良き感化を与え、救いの力を持った使命を宣言しなければならない。神の品性を明らかにしなければならない。…憐れみに満ちた最後の光、世界に伝えるべき最後の憐れみの使命は、神の愛の啓示である。神の子らは神の栄光を表わさなければならない。彼らはその生活と品性において、神の恵みが彼らのためにどんなことをなしたかを表わさなければならない」(実物教訓 p391,392 1900)。

IV . 福音

1. 滅びるのはむつかしい。

失われる為には、既に与えられた賜物と今も強く迫ってくる神の愛を拒まなければならない。

「なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。わたしたちはこう考えている。ひとりの人がすべての人の為に死んだ以上、すべての人が死んだのである。そして、彼がすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである」(第二コリント5:14,15)。

①ひとりの御方が我々の為に死ななかつたら、現在全人類は生きていない。

②我々がクリスチャンであろうとなかろうと、この生命はキリストの犠牲によって無償で与えられている。

「この世の生命さえキリストの死のおかげである。我々の食べるパンはキリストの裂かれたからだをもって買われたものである。我々の飲む水はキリストの流された血によって買われたのである。聖徒であろうと、罪人であろうと、日毎の食物を食べる者は誰でもキリストの体と血によって養われているのである。どのパンにもカルバリーの十字架の印がおされている。どの泉にもカルバリーの十字架が反映している」(各時代の希望下 p141,1898)。

③これを心から信じる者にとって利己的に生きる事は不可能になる。

「なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである」(第二コリント5:14)。

「神の慈愛があなたを悔い改めに導く」(ローマ2:4)。

「我々は『神の慈愛が人間を悔い改めに導く場合もある』と言い換える必要はありません。聖書はそれが必ずや人を悔い改めに導くと断言しているのであり、我々はその確かさを確信してよいのです。神の慈愛が続く限り、全人類は必ず悔い改めに導かれるのです」(EJW ST 1895 11/21)。

「もちろん人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い

行為を恥じて悪い習慣をやめる事があ
ります。けれども人が正しい事をしたい
と切望して改めようと努力する時はい
つでも、キリストの力が働いて彼らを
引きつけているのです。自分たちは意
識してはいないけれども、その力が心
のうちに働いて良心を呼びさまし、行
為が改められるのであります。…罪人
はこの愛を拒み、キリストに引かれるこ
とを拒むこともできますが、逆らいさえ
しなければ、自然にイエスに引きよせ
られるのであります」(キリストへの道
p28,29 1892)。

※神は我々が何もしないうちから
我々を救われる為にあらゆる手を尽く
してこられた。「○○さんをどうか救っ
てください」「弱い私を助けてください」
などと祈る前から助けは目の前に与え
られている。我々がすべきなのは、既
に神自ら率先して我々を救おうと働い
ておられるのに気付くことである。そ
れに気付くならおのずと感謝が起こり、
悔い改めに導かれる。知りつつ罪を犯
し続けるのは不可能になる。罪を犯せ
るのはその人がまだ神の愛を知らない
か、知ったうえで聖霊を拒んだかのど
ちらかである。

「(福音が示されても)すべての人は
悔い改めません。何故でしょう?彼らは
神の慈愛と忍耐と寛容との富を軽ん
じ、主の憐れみの導きから離れるから
です。しかしどんな人でも主に抵抗し
なければ、悔い改めと救いに導かれて
しまうのです」(EJW ST 1895 11/21)。

「はかり知れない愛は、主に贖われた
者たちが世から天へわたる為の通路
を設けられた。その通路というのは神
の御子である。天使の道案内人たちは
我々の迷いやすい足を導くためにつ
かわされた。天からの輝くはしごは全
ての人の行く手をさえぎり、人が不道
徳と愚行に落ちていかなないように立ち
はだかる。人が敢えて罪の生活を続け
るには十字架につけられた贖い主を
踏みにじっていかなければならないの
である」(サインズ 1882 1/28)。

2. 人類は既に神の子で、永遠の命を
譲り受ける資格を与えられている。

「しかし、信仰が現れる前には、わたし
たちは律法の下で監視されており、や
がて啓示される信仰の時まで閉じ込
められていた。このようにして律法は、
信仰によって義とされるために、わた
したちをキリストに連れて行く養育掛
となったのである。…あなたがたはみ
な、キリスト・イエスにある信仰によっ
て、神の子なのである。…相続人が子
供である間は、全財産の持ち主であり
ながら、僕となんの差別もなく、父親の
定めた時期までは、管理人や後見人
の監督の下に置かれているのである。
それと同じく、わたしたちも子供であ
った時には、いわゆるこの世のもろも
ろの霊力の下に、縛られていた者であ
った。しかし、時の満ちるに及んで、神は
御子を女から生まれさせ、律法の下に
生まれさせて、おっかわしになった。そ
れは、律法の下にある者をあがない
出すため、わたしたちに子たる身分を

授けるためであった」(ガラテヤ3:23-26;4:1-5)。

「神は人類を見捨てられてはいないので、最初に創造された人間が神の子と呼ばれて以来、全人類は神の子孫であり、跡継ぎなのです。…「信仰が現れる前には」すべての人間が神からさまよい出ていたにもかかわらず、いつかその約束を受け入れるようになるまで律法の下で監視され、養育掛に閉じ込められて、守られていたのです。不信心な者、罪の奴隷となっている者でさえ神は自分の子供だと認められるとは、何という特権でしょう。さまよえる放蕩息子ではありますが、それでも子供なのです。神は全人類を『御子にあって受け入れられた』のです。この思恵期間は神が父である事を我々が知り、実際に神の子となる為のチャンスとして与えられているのです」(EJWOT p166,167)。

※律法の下にあるのは旧約時代の人々ではなく、今日でも信仰によって罪の支配から解放されていない人々である。信仰によって学ばない事を我々は痛みによって学ぶ。多く人は苦しみに遭い、窮地に陥るまで神に頼ろうとしない。神の鞭は愚かな者をキリストのもとへ引きずって行く養育掛である。

「相続は信仰の義によるものですから、どの子孫にも確実に与えられており、誰でも手に入れる事ができます。信仰は誰でも楽に自分のものとす

る事ができるので、全ての人々が公平なチャンスを与えられているわけです。神はすべての人に等しく信仰を分けあたえておられます。信仰のはかりは恵みのはかりであり、『キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みがあたえられています(エペソ4:7)。キリストは全ての人におしみなく与えられているからです」(EJW ST 1896 2/27)。

※我々の伝える福音に力がないのは人々が悪いのではなく、我々の福音の理解がないせいである。それを真に理解し、体験する時、大いなる叫びが始まる。1888年の使命者たちはこの大いなる光の最初の兆しを見たのだった。

3. すべての人はすでに義と認められている。

「このようなわけでひとりの人によって罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうしてすべての人が罪を犯したので死が全人類に入りこんだのである。…このようなわけでひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によっていのちを得させる義が全ての人に及ぶのである。すなわち、ひとり人の不従順によって多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのである」(ローマ5:12,18,19)。

「ここに例外はありません。罪の定めが全ての人に臨んだように、義認は全

ての人に及ぶのです。主は全人類の為に御自分を与えられました。いえ、あらゆる人々に御自分をお与えになったのです。無償の賜物はすべての人のものとなりました。それが何の価もいらぬ賜物であるという事自体、それが例外なく与えられるのを証明しています。もしそれが何らかの特別な資格を有する者に与えられるのであれば、もうそれは賜物とは呼べません。ですからキリストの義と生命の賜物が地上のすべての人に与えられたというのは事実であり、聖書が明らかにそう証言しています。もし本人が拒みさえしなければ、今まで生を受けたどんな人間も救われてならない理由はないのです。多くの人々はこんなに気前良く与えられている賜物を受けようともしないのです」(EJW ST 1893/126)。

「信仰を持つという事は主御自身を持つという事ですから、キリストにある信仰は必ず神の義をもたらします。この信仰はキリストが御自分をすべての人に与えられたように全人類に与えられています。では何が総ての人が救われるのをはばむのかと皆さんは聞かれるでしょう。実は何も無いのです。ただ、総ての人はその与えられた信仰を保たないというだけで、もしすべての人が神から与えられた信仰を捨てないなら、一人残らず救われるでしょう」(EJW ST 1896 1/16)。

4. 神は御自分から罪人を滅ぼされるのではない。

罪人が壁を作って救いを拒み続ける時にのみ、滅びという実を刈り取る。

「悪人の子供が信じるのは、善人の子供が信じるのと同じくらい自然な事です。人間が信じる事に困難を感じるのは、自己に対する誇りという壁を築き上げた場合だけです」(EJW ST 1896 8/6)。

ホワイト夫人も全く同意見である。

「神は光であり、その内に闇はない。光がなければ影もできない。しかし影は太陽によってできるが、太陽がそれをつくり出すのではない。影をつくり出すのは光をさえぎる障害物であり、神の与えられる光を拒むと必ずその結果があらわれる。影ができ、その暗さは与えられた光の分だけ暗いのである。…『人は自分でまいたものを刈りとるようになる』(ガラテヤ6:7)。神は誰一人として滅ぼしたまわない。滅びるすべての人間は自分で自分を滅ぼすのである。人間が良心のささやきを聞き流す時、不信の種がまかれ、必ずその実を刈り取る事になる」(RH 1885 11/24)。

5. 罪に死ぬ時、それ以上罪を犯し続けることに耐えられなくなる。

「一人の人が…腸チフスで死んだとします。もう一度よみがえって意識を回復したとして、この人は再び同じ闘病生活を続ける事ができるでしょうか。彼は殺される事を願うでしょう。何故なら一度彼を死に至らしめた病気でまた苦し

まねばならないのですから。同様に人が罪に死ぬ時、…自分を殺した罪と一緒によみがえることはできないのです。しかし多くの人の問題は、死にたくなる程罪にいや気がさしていない、という事です。彼らはいくつかの特定の罪に関してうんざりし、それらの罪に死にたいと願い、そしてそれを捨て去ったと思ひ込むかもしれませんが。それからまた別のいくつかの罪を嫌うようになるかもしれません。その罪があると、人々からは嫌われるし、低く評価されるというので、それらも捨てようとしています。しかし彼らは罪一心に巣くっている、まだ行動にあらわれる段階にない罪自体を憎むに至っていないのです。…人が罪を心から憎むようになる時…それ以上罪の中に生き続けなさいと言うのが無理な話なのです」(ATJ GCB 1895, p352)。

「我々にはいつでも罪を犯す機会があります。毎日それは目の前にあります。しかし『いつも主イエスの死をこの身に負っている』『私は日々死んでいる』という御言葉が立ちほだかります。…罪の誘いにのるよりは死んだ方がましだと思うのです。…『罪に対して死んだわたしたちがどうしてなおその中に生きておれるだろうか。それともあなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである』…『あなたがたは…罪に支配されることはない』罪の支配から救われた者は、罪に仕える事から救われたのです」(同 p353)。

6. 聖霊に支配される時に善を行なうのがたやすくなる。

「聖霊によって歩きなさい。そうすれば決して肉の欲を満たすことはない。何故なら肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして二つのものは互いに相逆らい、その結果あなたがたは自分でしようと思うことをすることができないようになる」(ガラテヤ 5:16,17)。

この聖句は二通りに解釈できる。

①聖霊があっても肉の欲が強すぎて勝利できない。

結論：この肉が変わるまで罪を犯し続ける。

②肉の欲があっても聖霊の力が強すぎて罪を犯せない。

結論：今から勝利することが可能。

どちらが福音だろうか。1888年のメッセンジャーたちは②の立場をとった。戦いは聖霊がして下さる以上、どんな肉の欲にも勝利できるのである。

「人間が悔い改めて神の御霊の下にある時、それは肉とその傾向や欲望から分離できるという事ではありません

ん。…否、以前と同じく墮落した罪深い肉を持ってはいますが、もはやその人はこれらの奴隷ではないという事なのです。彼は傾向や欲望といった肉の支配から解かれ、御霊の支配に服するのです。今やその人は肉に勝利し、肉を十字架につけ、肉を抑え続ける力に支配されるのです。…肉自体が聖霊による神の力の支配下につながれるのですべての悪は根もとから断たれ、生活の内に表わされなくなります」(ATJ RH 1900 9/18)。

「罪の増し加わったところには恵みはそれ以上に満ちあふれた(原語訳)。それは罪が支配するに至ったように恵みもまた義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより永遠のいのちを得させる為である」(ローマ5:20,21)。

「恵みが支配する時、悪を行なうよりも善を行なう方がたやすい…というのがその比較です。お気づきになりましたか? 罪が支配するに至ったように、恵みもまた支配するのです。罪が支配している時は恵みを締め出し、神が与える力を全く寄せつけないようにするのですが、一旦、罪の力が破られて恵みが支配するとそれは罪を追いつき、罪の力を残らず撃退するわけです。ですから罪の支配のもとに善より悪を行なうのがたやすいのと全く同じように、恵みの支配下においては悪を行なうより、善を行なうほうがたやすいのです」(ATJ RH 1899 7/25)。

「もし恵みに罪以上の力がなければ、

罪から救われるのは不可能ですから、罪からの救いは恵みに罪以上の力があるか否かにかかっているのです。…昔から人間にとって善を行なうのは非常な努力を要してきました。これは人間が生まれつき罪の力の絶対的な支配に服している為です。そしてその支配が続く限り、人間が知っている、そして欲している善は行なう事が困難どころか、全く不可能なのです。しかしそれ以上の力が支配するなら、先の力に服していた以上にその力に服することがたやすいのは、自明の理ではありませんか」(ATJ RH 1896 9/1)。

「新生すると古い性質に対しはるかに優勢な立場になります。…神の相続にあずかる者は地上の両親よりも天の父が偉大であるように、遺伝によって受けた悪への傾向よりも義を行なわせる力のほうが、彼の内に強く働きかけるのです」(EJW EC p66)。

7. 選択は我々にまかされているが、実行力を与えるのは神である。

「我々は自分自身を主に明け渡すべきである。この明け渡しは完全になれる時、キリストは…我々の為に始められた働きを終えることができになる。それから主は我々を完全に回復する事ができるのである」(RH1907 5/30)。

「ただ必要なのは本当の意志の力とは何であるかを知ることでありませぬ。意志とは人の性質を支配している力、決

断力、選択の力であります。すべてはただ意志の正しい行動にかかっているのです。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神にささげることではできません。けれども神に仕えようとするはできます。意志は神にささげることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって神の喜びたもうように望み、また行なうようにしてください。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまた彼と一致するようになります」(キリストへの道 p57)。

※エンジンは神の力だが、ハンドルは我々が聖霊の導きに従って握らねばならない。

8. 安息日は勝利する力を与える喜びの日である。

「万物はみな御子によって造られたからである。…万物は彼にあって成り立っている。そして自らはそのからだなる教会のかしらである。…神は御旨によって御子の…十字架の血によって平和をつくり、万物…をことごとく彼によって御自分と和解させて下さったのである。あなたがたもかつては悪い行いをして心の中で神に敵対していた。しかし今では御子はその肉のからだによりその死をとおしてあなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷

のない、責められるところのない者として、みまえに立たせてくださったのである」(コロサイ1:15-22)。

「キリストが創造主であるという宣言と、彼にあって我々は贖われているという宣言が同時になされているのには、理由があります。…やみの力から救われる事について書いているパウロはその救い主の力を我々に知らせようとしているのです。教会のかしらを全てを造られた創造主であることを知ることは、我々に希望を与えてくれるのです」(EJW CHR p34)。

「神は御子を万物の相続者と定め、また御子によってもろもろの世界を造られた。御子は…その力ある言葉をもって万物を保っておられる」(ヘブル1:2,3)。

「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。…イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えは我が神に顧みられない』と言うか。あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者もつかれはてて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」(イザヤ40:26-31)。

「主の力は何もないところに何でも創造できるという能力です。ですから主は力のない者を通して奇跡を行なうことができるのです。それで何でもキリストの創造の力を思い起こさせるものは、我々の霊的力と勇気を奮いたたせるに違いないのです。そしてこれが安息日の目的なのです」(EJW CRR p35)。

「詩篇92篇、安息日の歌を読んでみて下さい。…安息日は創造の記念日です。…詩篇記者は神の望まれる安息日の守りかたを実行しました。自然界に思いをはせ、そこにあらわされた神の力と慈愛を読み取ったのです。そうする事によって、百合の花をソロモンをさえしのぐ美でよそおわれる神は、はるかそれ以上に人類を覚えていてくださるのを悟り、…天体を見上げてそれらが無から創造されたのを思う時、その同じ力が人間を弱さから救い出されるとの希望が湧いてくるのでした。…まとめると次のようになります。

① 神に対する信仰はその力を知ることによって得られる。神への不信とは、神が御自分の約束を果される力があるのを知っていないことを意味する。

② 神の創造のわざをよく考える時、神の力についての正しい知識が得られる(ローマ1:20)。

③ 信仰が勝利を与える(第一ヨハネ5:4)。…聖書と自然を通して神の力を知ることにより、信仰を得て勝利す

る。…ですから安息日を正しく守ることは、戦うクリスチャンにとって力の補給となるのです」(同 p36,37)。

V. 聖所の清め

1. 今は大いなる贖罪の日である。

ジョーンズとワゴナーと一緒に各地でリバイバル集会を持っていた頃のホワイト夫人の言葉をみると、贖罪の日到我々がなすべき特別な働きがあるのを繰返し強調している。

1890

1/21 「我々は大いなる贖罪の日に住んでおり、民の罪から聖所を清めるキリストの働きに協力しなければならない」(以下RH記事)。

1/28 「キリストは天の聖所におられて民のとりなしをしておられる。…主は聖所を民の罪から清めておられる。我々の働きは何であろうか？キリストの働きに協力することである。」

2/4 「キリストの仲保の働きは、…誰よりも多くの光を与えられていると公言する民によって学ばれもせず、理解されてもいない。」

2/11 「キリストは天の宮を民の罪から清めておられるが、我々は魂の宮を道徳的汚れから清めることによって、

主の働きに協力しなければならない。」

2/25 「人々はイエスが(彼らの)…贖いをするために入って行かれた聖所に入っていない。我々は現代の真理を理解する為に聖霊を必要としているが、教会は霊的かんばつ状態にある。」

3/4 「神の御座からの光が照らしているが、これは何の為にだろうか。それは民が大いなる神の日に立つことができるように、用意させようとしておられるのである。」

3/11 「この二年間伝えられてきたメッセージに我々は主の御声をさらに確かに聞いた。…我々は信仰とは何であるか、その栄光をやっとかいま見はじめた。」

3/18 「過去三年半の間、あなたがたは天からの光を受けてきた。…主はそれをあなたの品性に現わし、あなたの経験に織り込もうとされる。…もし兄弟たちが神と協力してきたなら、過去三年間我々に送られてきたメッセージが天からのものであることを疑わなかっただろう。」

2. 聖所の清めとは神の民の清めである。

「地上の聖所の清めは、聖所からイスラエルの子らの汚れを取り除く働きでした。…この聖所の働きをなし終えるという事は、また民の為に奉仕の終了を意味します。…(地上の)聖所の清め

は…真の幕屋においてイエスを信じる者の罪による汚れが清められるのを予表していたのです。そしてこの清めの時期は…2300の夕と朝の間、紀元1844年だとキリストが宣言されました。…イエスを信じる者を完全に罪に勝利させ、罪人を滅ぼすことによって宇宙から罪のしみをめぐり去る時に、この聖所は清められるのです。神の奥義の完成は福音の働きの終了を意味します。福音の働きの終了とは、まず第一に一人びとりの信者から全ての罪…を除き、永遠の義をもたらし、その内にキリストが完全にあらわされることです。…そして第二に福音を受け入れなかった者の滅びです。…もはや生かされていても自分たちの惨めさを増していくだけなのに、敢えて生命を与え続けるというのは神の御心ではありません。…

聖所が清められて福音の働きが終了する為には、まず民の間に清めがなし終えられねばならないことを、地上の聖所での働きは示しています。つまり聖所での奉仕にあずかる一人びとりが罪を犯さなくなると、とがの贖いがなし終えられるまでは、聖所自体が罪から清められることはないのです。…民の告白と祭司のとりなしによって罪、とが、不法が聖所に流れ込み続ける間は、聖所は清められないのです。…聖所の清めを可能にする為には、この流れがその源泉である礼拝者の心…で根絶やしにされねばなりません。…真の幕屋におけるキリストの働きは罪を永遠に取り除き、彼のもとに来る者を

完全にします」(ATJ CCP p113-119)。

「たとえすべての罪の記録が…消されようとも、罪は残ります。何故なら罪は我々の内にあるからです。…罪の除去とは人間の本質、その性質から罪を消し去ることです。罪を消すというのは、それを我々の性質から除去する事によって、我々が再び罪を知らなくなる事なのです。…それは永遠に彼らから離れ去り、彼等の新しい性質にとってそれは異質のものとなり、自分達がかつて罪を犯したことを覚えてはいるかもしれませんが、罪自体を忘れる…つまり二度とそんなものを犯そうとは思わなくなっているのです。これが真の幕屋におけるキリストの働きです」(EJW RH 1902 9/30)。

「…再臨の直前になされる聖所の清めは、地上の神の民の完全な清めと同時に行なわれ、…彼らを天に移されるにふさわしい者とするのです」(EJW EC p365-367,1900)。

「イエスが来られる時には…『しみやしわやそのたぐいのものが一切なく』『清くて傷のない栄光の姿の教会』を御自分に迎え、御自身がすべての聖徒の内に完全に反映されているのを御覧になります。そして主が来られる前にその民はこの状態に達していなければなりません。…この完全の状態、一人びとりの信者にイエスのかたちが完全にあらわされることこそ神の奥義の成就であり、…聖所の清めによって完成される最後の働きです。…ですから我々

は今や、かつてなかった程悔い改めて生まれかわり、我々の罪が取り除かれるようにしなければなりません」(ATJ CCP p123-125)。

3. 清められない者は三天使の使命を伝えることができない。

「もしあなたの精神が、思いが、考え方、願い、傾向がわずかでも世的であるなら、髪一筋ほどでもこの世とのつながりがあるなら、この世の悪の勢力(獣とその像)について世の人々に警告し、そこから全く離れるようにと呼び掛けても、それは全く力のないものとなるでしょう」(ATJ GCB 1893, p123)。

4. 我々が清められるのは神を擁護するためでもある。

「我々は厳粛な立場にあります。いまだかつて誰も想像しなかった程の献身をしなければならぬところまで来ているのです。『彼らはあなたのおきてを踏みにじりました。今は主の働かれる時です』(詩篇119:126日曜休業令を指す)。との厳粛な思いで神に献身し、仕える時なのです。…皆さん、その同じ厳粛な警告がオーストラリアから送られています。『大きな決定的な事件がすぐにも起ころうとしている。少しでもそれを遅らせるなら、神の品性とその主権が軽んじられる』と。皆さん、我々の不注意と無関心な態度が神の主権を危うくするというのです」(同 p73)。

「神はサタンによって不公平で無情で残酷でさえあると非難されています。多くの人々がその同じ批判を繰り返してきました。しかし裁きは神の義を証明します。人間の品性と同様、神の品性が裁かれているのです。天地創造以来、神と人がどのような道をたどってきたか、そしてその結果がどうなったかが、裁きにおいて…明らかにされます。そしてすべてが完全に明るみに出されると、神の正しさは敵でさえも認めざるを得なくなるのです」(EJW ST 1896 1/9)。

5. 清めは福音である。

「皆さん、後の雨とは天に移される為の準備だと考えれば、喜ばしい事ではありませんか。…主が私や皆さんの心に何か語られるのは、主が我々を天へ移そうにも罪まで一緒に持つて行くことはできないからなのです。そうではありませんか？ですから何の為に主が我々に罪の深さと大きさを見せるかと言えば、罪から我々を救い出し、天に移す為に他なりません」(ATJ GCB 1893, p205)。

結論

下手な評論はやめにして、各自の判断におまかせしたい。真剣に心に問いかけて欲しい。我々に欠けていたのはこれではなかったのか、と。これを受け入れなかったから百年間も再臨を遅

らせたのではないかと。そしてこれを受け入れたら、すぐにでもリバイバルの炎は燃えあがるのではないかと。

独断的な言いかたは避けたい。しかし私個人はこれを信じるが故に、全ての人々から歓迎されるでもないこのような印刷物を、読者が送って下さる献金を十数万円もつぎ込んで、今回も出版させて頂いた。リアリティーも創刊以来1年半、6回目を迎え、今までの号をふりかえると欠点ばかりが目につく。それにもかかわらず取るに足りない本誌を支え励まして下さった、北は北海道から南は沖縄、遠くはアメリカ、フィリピン、シンガポールの信者の方々、また牧師の先生方、本当に感謝に耐えない。

しかし一つのお願がある。今回のメッセージでリアリティーは行きつくべきところまで達したような気がする。これを体得せずに先に進んではいけないし、たとえ進み出しても、またこのメッセージに引き戻されるだろう。読者もこの奥義を把握するまで次号を期待しないで頂きたい。まだまだ書きたい事、書かねばならない事はいくらかもある。しかし実践の伴わない知識は人を盲目にするだけである。

知らされるとは恐ろしく責任のある事だと思ふ。義の太陽はそれを受け入れる者の心を氷のように溶かすが、受け入れない者、聞き流す者の心は粘土のように固めてしまう、とはよく言っ

たものだと思う。1888年のメッセージを聞いた指導者の中には心の底で拒み続け、ついに「立ち返って悔い改める事ができないところまで行ってしまった者もいる」とホワイト夫人は書かれた。あの運命の総会以来「多くが暗黒の道に入って行った。ある者は二度と戻ることができない。彼らはよろめき、ついに倒れてしまう。彼らは神を試みたのであり、光を拒んだのである」(バトクリーク教会への特別な証 1896 p32-42; 「牧師への勧告」p89,90)。

1888年のメッセージに対して我々は二通りの立場を取ることができる。真理として認めるか、誤りだとするか…その中間はないように思える。何故なら預言者は全面的にこのメッセージを支持したからであり、そこにいくらかでも誤りが含まれていたとすれば、彼女がそれを指摘した筈だからである。1888年の信仰による義は彼女の言う通り、「大いなる叫びの始まり」であったか、それともジョーンズとワゴナーが勘違いしていたかのどちらかである。そしてもし後者だとするなら、預言者自身の信頼性も疑われねばならない。

もし真理だとすれば、これまた二通りの反応が期待できると思う。それを受け入れて清められるか、拒んでかたくなになるか、二つに一つである。真理とはそれほど強力なのであって、そうでなければ真理とは言えない。これを書いている私自身は読者の皆さんより責任が重いかも知れない。それはすぐには表面化しないかもしれないが、

私自身この真理に触れたことによってすでに運命のわかれ道を歩み始めたと言っている。知った以上何も起こらない筈がない。聖霊を受けるか、拒むかのどちらかである。

時は迫っており、どこかで何かが起こらねばならない。「今、何故 SDA か」の解答となる何かがある。

1986 Vol.1 リアリティより
津嘉山 睦

あとがき

～生きて主を迎える人々の
特別な清め～

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていく時に、新しい義務が示されるのであった。もう1つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

預言者は語っている。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁(あく)のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』(マラキ 3:2,3)。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむ時地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審

判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭(めいりょう)に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』(マラキ3:4)。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である(エペソ5:27)。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である(雅歌6:10)」大争闘下140,141。

「『かつてなかったほどの悩みの時』が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、1つの経験—今われわれが持つておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験—が必要なのである。現実の困難というものは、予想したほどではないということがしばしばある。しかし、われわれの前にある危機の場合は、そうではない。どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには、とうてい及ばない。この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。『主なる神は言われる、わたしは生き

ている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにも、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである』(エゼキエル 14:20)。

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」大争闘下397。

考察：

1. 後の雨 - 大いなる叫びは 1888 ~ 1892 年になされなかった。

曲解される引用文：

「テストの時は、まさにわれわれに迫っている。第三天使の大いなる叫びは、罪をゆるしたもう贖い主、キリストの義の啓示の内にすでに

始まった。これは全地をその栄光で満たす天使の光の始まりである」RH1/22,1892;1SM363。

引用文の言っていること：

大いなる叫びは啓示の内に始まった。つまり、大いなる叫びの啓示が始まったのであった。しかし、教会はそれを拒んだ。

「わたしはミネアポリスの集会以来、かつてなかったほどのラオデキア状態を見せられた」RH8-26,1890。

引用文の言っていないこと：

この引用文は、大いなる叫びが宣べ伝え始められたとは言っていない。啓示されることと宣伝される事とは大いに違いがある。

① 黙示録 18:2-4 の大いなる叫びはバビロンに対する叫びである。しかし、1888 年の使命は、セブンスデー・アドベンチストに与えられた光の啓示であった。

② 1888 ~ 1892 の間、黙示録 18:1-4 は成就していなかった。

③ 主の僕は、大いなる叫びの宣布は未来と考えていた。

「わたしは、天から大いなる御使いが下って (Will)、この世界の動きを閉じる第三天使に合流する時—聖霊の注

ぎがいつ起こるかという特定の時を知らない…」7BC984。(RH3-29,1892)。「黙示録18章の預言がまもなく成就するであろう(Will)。第三天使の使命が宣布される間、大いなる御使いが天より大いなる力を持って下ってきて(is to come down)その栄光で地は照らされる(is to be)」同1904年。

④ 聖書も証の書も、バビロンが完全に倒れてから、後の雨—大いなる叫びが宣布されることを教えている。

⑤ A.T. ジョーンズも後の雨が降っていると、大いなる叫びがなされているとか言っていない。後の雨—大いなる叫びを拒んだことをはっきりと認めるように訴えたのであった。(世界総会広報、1893年参照)。

⑥ 大いなる叫びは後の雨によるものである。後の雨に「罪の除去」が先行する。「罪の除去」は「生ける者のさばき」において起こる経験である。「生ける者の裁き」は、日曜休業令が立てられて始まる。

⑦ 教会の大いなるふるいが、後の雨—大いなる叫びに先行する(初文437-440;5T80-82;2SM380;6T400-401)。

2. 罪の性質

「品性の改変は、主が来られる前に起こらねばならない。我々の性質は純潔で清くなければならない」OHC278。

「キリストがおいでになるとき、我々の品性は変えられない。この汚れた肉体は変えられて、キリストの輝かしい肉体

のように形作られるが、その時我々の内に道徳的変化は起こらないのである」RH1888,8-7。

罪の除去とはどういうことか? 本文 68 ページ

① 罪を犯さなくなることだけではない。

② 我々の性質は罪なき状態になるのである。大争闘下 396-397 参照。

・ 罪の欲望なくなる。

・ キリストに罪がなかったような状態になる。

金城 重博